【爆乳Wお姫様】
異世界救ってお姫様とご褒美孕ませエッチ♪
特典台本

※一部本編と異なる場合があります

トラック０１

ソフィ「この世界に様々な種族が産まれて千年以上の月日がたちました」

ソフィ「世界最大の人口を誇る人間族。大海を統べる人魚族。鉱山地帯に居つくドワーフ族。小さな体躯に数多の神秘を宿す妖精族」

エミィ「長命にして強大な魔力を有するエルフ族。神話の語り部として伝説の存在と称される龍人族。そして――」

ソフィ「強大な魔に魅入られ異形の成へと変貌し――」

エミィ「己が理性を捨て去り本能のままに生き、世界の膿とも称される害悪種である――」

ソフィa「魔人族」

エミィa「魔人族」

ソフィ「その他にも国を持たない小さな種族が数多く共生するこの世界」

エミィ「各種族同士、時には争い、時には協力し、破壊と再生を繰り返しながら繁栄を続けてきたけれども――」

ソフィ「創世歴1999年。世界は突如破滅の危機に瀕することになります」

エミィ　「切っ掛けは単純にして明解。知性を持たず、およそ統率という概念がなかった魔人族に王が生まれてしまった」

ソフィ　「――世界を滅ぼす魔王の誕生です」

ソフィ　「魔王は世界中の種族を根絶やしにしようと無差別に侵略を開始しました」

エミィ　「魔王が束ねる魔人族軍は強大であり、世界の均衡は瓦解」

エミィ　「力を持たない小国は蹂躙され、大国も対処が間に合わず世界は混沌へと突き進んでいく」

ソフィ　「魔人族の侵略は留まる事を知らず、対抗するには今まで誰もなしえたことのない大規模な同盟軍を興す必要がありました」

エミィ　「しかし文化も宗教も違う数多の種族が即座に手を組むなど出来るはずもなく……」

ソフィ　「せめてどの種族にも属さない、それでいて魔王に匹敵する程強く、正義に準じる高潔な存在……種族同盟の旗印となるお方がいなければ魔人族には対抗できません」

エミィ　「この世界にそんなお方は存在しえませんでしたが……存在しないのであれば異世界から呼び出せばいい」

ソフィ　「そう考えた人間族の王女である私……ソフィーリア・フォン・エルニア・ルーゲンベルクと」

エミィ　「エルフ族の王女である私、エミリア・ド・メルルノアは禁術とされていた異世界召喚術を用い、世界の因果から外れた英雄である〝勇者〟の召喚を実行。成功させました」

ソフィ　「魔王と同等以上の魔力と武勇、そして何よりも、勇者様だけが持ちえるあまねく闇を照らしだす暖かな光が、魔人族の進行によって犯された人々の心を救済してくださいました」

エミィ　「勇者様のお力の元、各国の長は同盟を結び魔王討伐軍を編成。その指揮を勇者様自身が担うことで連戦連勝」

ソフィ　「魔王が進行を開始してから約2年後の創世歴2001年。ついに勇者様は魔王を討ち滅ぼすことに成功し、世界は文字通り救済されたのです」

エミィ　「その後創世歴は勇者歴へと改められ、勇者歴元年。世界はかつての平和を取り戻すべく、新たな未来へと歩み始めるのでした」

トラック０２

ソフィ「……な～んて小難しい話をしてきた訳ですが……今となっては世界の平和なんてどうでもいいんです！」

エミィ「あら。とても人間族を統べるお姫様であるあの『ソフィーリア・フォン・エルニア・ルーゲンベルク』様のお言葉とは思えない発言だけど……ふふ♪　一体どうしたのかしら？」

ソフィ「あ、いえ……別に世界が平和になった事が嫌とかではなくてですね？　でも、そのぅ……！」

ソフィ「え～っと……エミィも知ってますよね？　勇者様が戦後間もなく、隣国の貴族令嬢に求婚されたり、共に戦った女騎士団長に求婚されたりしたって……」

エミィ「勿論知っているわよ。付け加えるなら、結婚が禁止されている宗教国家の女教皇様にまで密かに告白された事も」

ソフィ「……ふぇ！？　そ、それは流石に初耳なんだけど！？　ぅ～……そんな所にもライバルがいたなんて……」

ソフィ　「って、そうじゃなくって！　つまりね？　世界が平和になってからというものの、勇者様に求婚をする女性が後をたたないんです！」

ソフィ　「確かに勇者様は強くて！　格好良くて！　優しくて！　逞しくて！　凛々しくて！　お子様からご老人まで、多くの人々に慕われる世界屈指の素敵な殿方ですけども！」

エミィ　「あら……この子ってば恥ずかしげもなく随分と大胆な事を……」

ソフィ　「それでもまさかここまで行動的な女性が多いだなんて……！　うぅ～～……ソフィもエミィも完全に出遅れてしまいましたよ～……」

エミィ　「そうね……私はエルフの国を……ソフィは人間の国を治めるお姫様だもの。戦後処理もあったしお互い勇者様に求婚する時間なんてなかったわ」

ソフィ　「きゅ、求婚……って……！？　ぅ……ま、まぁ……そうなんですけど……！　そうなんですけども……！　そ、そんな直球で言われると……あぅあぅ～……♪　ソフィ、照れちゃいますよ～……♪」

エミィ　「……はぁ……そんな事でいちいち照れているから他の女性に先を越されてしまうというのに……」

エミィ　「……ふぅ～……それで？　わざわざ私に話をしに来たという事は何か相談があるのでしょう？　前置きはいいから早く言いなさいな」

ソフィ　「あぅ～……エミィってば相変わらずイケずだよ～……ぅ～……あのね？　ソフィも、勇者様が誰かに取られちゃわないように、そのぅ……こ、告白！　しようかなって、思ってるんだけど……」

ソフィ　「そのぅ……いざ告白しようって思うと、どうしても怖くなっちゃって……恥ずかしくなっちゃって……勇気が出なくなっちゃって……」

ソフィ　「だからね？　幼い頃から一緒のエミィと……一緒に告白したいなって……思って……」

ソフィ　「だって……エミィも勇者様の事……好きなんだもんね？　勇者様の事……愛してるんだもんね？」

エミィ　「あら？　私の気持ちをソフィに話したことはないはずですけど……？」

ソフィ　「そんなの言われなくても分かるもん……何年一緒にいると思ってるの？」

エミィ　「……ふふ♪　確かに、お互いの好きな人くらい言わなくても分かる仲だものね」

エミィ　「……えぇそうよ？　私も勇者様の事が好き……大好きよ……♪　エルフとしてある程度生きてきたけれども、あれほど恋焦がれた殿方は初めて」

エミィ　「勇者様と結婚したい……愛し合いたい……お互いの初めてを交換し合いたい……勇者様との赤ちゃんをこのお腹で孕みたい、産みたい……そう願わずにはいられないほどお慕いしているわ」

エミィ　「もぅ何度あの方を想い自分で慰めたことか……」

エミィ　「……でもいいの？　私とソフィが同時に告白だなんて……私とソフィ、どちらか一方が泣くハメになると思うのだけれど？」

ソフィ　「……うん……確かに普通に告白したらそうなっちゃうかもだけど……でもそうじゃないの。ソフィはね？　勇者様と一緒になりたいけど、それと同時にエミィとも争いたくないし、喧嘩もしたくないの」

ソフィ　「だからね？　ありきたりな話ではあるんだけど、英雄色を好むっていうじゃない？」

エミィ　「ふぅん……そう……そういう事ね……」

ソフィ　「えへへ♪　そう……勇者様が誰かに取られちゃう前に、ソフィとエミィの2人で一緒に、勇者様のお嫁さんに立候補しちゃおうかなって思って」

エミィ　「……勇者様は奥手だけど賢いお方……単独で告白されてもまた断られる可能性は高いけれども、2人の女性……それも世界に3人といない絶世のお姫様2人から同時に告白されて尚断ってしまっては、いくら勇者様でも面子がたたなくなってしまうし……」

エミィ　「果てには世間から女性に興味がない男色家……ホモ疑惑をかけられあらぬ噂が独り歩きしてしまうでしょうね」

エミィ　「……ふふ♪　あのお気楽で打算を知らないソフィからこんな提案をされるだなんて驚きだわ♪」

ソフィ　「べ、別にそんな大層な事は考えてないよ！？ただ、エミィとだったら勇者様の奥さんになってもいいかなって……一緒に愛されてもいいかなって思っただけで……」

エミィ　「そうね……正直私も一人で勇者様に告白して成功するイメージはあまり持てていなかったし、かといってソフィ以外の女性と一緒に勇者様のお嫁さんになるというのもイメージできなかったから……」

ソフィ　「……な、なら……！」

エミィ　「えぇ、いいわ。今夜にでも勇者様をお呼びして、そのまま告白しましょう」

ソフィ　「ほ、本当！？　あぅ～……エミィに協力してもらえてよかった～……って、ふぇ！？　こ、今夜！？　えっ！　いくらなんでもそんな急にだなんて！　ソフィ、まだ心の準備が……！」

エミィ　「あら、東国のことわざに『思い立ったが吉日』ともあるでしょう？　今この時にも勇者様に求婚する女性が現れないとも限らないのだから即日行動あるのみ」

エミィ　「となれば、今すぐにでも身を清め、勇者様に抱いていただくための勝負下着をメイドに用意して貰わなくては……」

ソフィ　「ぅ～……あぅ～……勇者様に告白……勇者様に告白ぅ～……そのまま勇者様に抱かれて……ソフィの初めても貰って貰って……ぅ～……あぅあぅ～……勇者様とせっくしゅしちゃって～……♪♪」

エミィ　「こらソフィ？　いつまでも呆けてないで早く支度をしなさい」

ソフィ　「あ、ちょっとエミィ！　待って待って！　置いて行かないでってば～～～～～……！！」

トラック０３

ソフィ　「あ、勇者様……！　良かった～……来ていただけたんですね」

エミィ　「ふふ♪　大丈夫です。ソフィも私もそこまで待っておりませんから」

エミィ　「まぁそもそもの話、このような夜更けに勇者様をお呼びたてしたのはこちら」

エミィ　「ですのに、いの一番に気遣ってくださるだなんて……流石は勇者様♪　天性の女たらしという噂は本当のようですね♪」

ソフィ　「エ、エミィ！？　そんな言い方勇者様に失礼ですよ！」

ソフィ　「ゆ、勇者様！　ソフィはそんな事思ってないですからね！？　勇者様は誠実で、お優しくて、とっっっても素敵なお方だと！　ソフィは知っておりますので！」

エミィ　「あらあら♪　先ほどまで……『勇者様が貴族の令嬢に告白された～～！』　『隣国の女騎士団長に告白された～～！』　などとワーワー騒いでいたソフィが、まさかそのような事を口にするだなんて……」

ソフィ　「わ――！！　わ――わ――！！　え、エミィ！！　その事は内緒にしてくださいとあれほど念を押したのにぃ！！」

エミィ　「……ですが……勇者様が未だ女性をお供にお連れしていないということは……勇者様？　数多の女性から告白されたという噂は嘘……または全てお断りした……という事でよろしいでしょうか？」

エミィ　「……ふふ♪　いえいえ、だったら何だ、という訳ではございません……ただ……少し安心しただけです……私達にもまだチャンスはあるのだと♪」

ソフィ　「……そ、そうです……！　実は、今宵、勇者様をこのような場にお呼びしたのには訳がありまして……」

ソフィ　「えっとですね？　勇者様……改めて確認なのですが、勇者様には今、お付き合いしている女性はいらっしゃらないんですよね？」

ソフィ　「……はふぅ……よかったです～……では勇者様。ソフィ、勇者様に大切なお話があるんです！」

エミィ　「もちろん、この場にいるからにはソフィ同様、私からも勇者様にお話しなくてはならない大切な事がありますわ」

エミィ　「といいましても、2人共内容は同じなのですけども」

ソフィ　「そ、そうです！　いうなればこれはソフィとエミィの2人からのお願いといいますか、提案といいますか……え、え～っと、そのですね……？」

エミィ　「ほらソフィ？　ここが勝負所なのですからもっとしゃんとしなさい？」

ソフィ　「う、うぅ……！　そうだよね……またいつどこでどんな女性が勇者様に告白するかもわからないんだもん……！　今しか……！　うん……！　うん……！」

ソフィ　「あ、あの！　勇者様！　その！　突然こんな事言われても困ってしまうかもしれませんが……！　ですが聞いてください！」

ソフィ　「そ、ソフィは……！　いえ……第12代ルーゲンベルク王国王女、ソフィーリア・フォン・エルニア・ルーゲンベルクは！　勇者様の事を……あなた様の事を……心の底からお慕い申し上げております……！！」

ソフィ　「……ぅぅ……は、はい……そうです……！　ソフィは勇者様の事が好きなんです……大好きなんです……！　控えめにいって……そのぅ……ぁ……愛しております……！」

エミィ　「……勇者様？　ソフィの可愛らしい告白に頬を染めているところ申し訳ありませんが、私からもよろしいですか？」

エミィ　「……はい♪　勇者様も既に察しておられる通り、私、第3代メルルノア大森林管理統治者であるエミリア・ド・メルルノアも、勇者様の事を……あなた様の事をお慕い申し上げております♪」

エミィ　「……勿論本気ですよ？　私も……そしてソフィも♪」

ソフィ　「……は、はい！　ソフィ、一世一代の本気の告白です！」

ソフィ　「ですから……はぃ……♪　ソフィ……勇者様を心の底より愛しております……好きです……大好きなんです……♪」

エミィ　「私も……エルフとして長く生きてきましたが、これほど熱く想い焦がれる殿方と出会えたのは初めてです」

エミィ　「少々俗っぽい言い方にはなってしまいますが……勇者様は私にとって運命のお方なのでしょうね♪」

エミィ　「ですからどうか……恋人として……将来の伴侶として……私を勇者様の傍にいさせて欲しいのです……愛し愛される関係になりたいのです……」

エミィ　「あぁ……♪　愛しております……勇者様……♪」

ソフィ　「あぁ……♪　愛してます……勇者様ぁ……♪」

ソフィ　「……って、えとえと……急にこんな風に詰め寄られても困っちゃいますよね……」

エミィ　「ふふ♪　同時に2人のお姫様に求愛されるだなんて、長い歴史を振り返ってみても勇者様だけでしょうね♪」

エミィ　「本当に罪作りな勇者様……♪」

エミィ　「で・す・が……♪」

エミィ　「勇者様？　私もソフィも、2人の内どちらか一方を選んで欲しい……などとは一言もいっておりませんよ？」

ソフィ　「え、えっとですね……？　勇者様……あのぅ……そのぅ……」

ソフィ「ソフィは勇者様を巡ってエミィと争いたくはなくて……でも勇者様を諦めるだなんてできるはずもなくて……」

エミィ「私もソフィも勇者様にベタ惚れですから……それならばいっそ、2人とも勇者様のお嫁さんにしていただければと思い、今夜2人で告白をさせていただいたんです♪」

ソフィ「そのぅ……他の知らない女性と一緒にお嫁さんになるよりは、幼い頃から仲の良いエミィとならばと……」

ソフィ「で、ですから勇者様さえよければ、ソフィとエミィ……2人とも娶ってはくださいませんでしょうか？」

エミィ「普通であればエルフと人間の王女を同時に娶るだなんて決してあり得ることではありませんが……世界の救世主である勇者様であれば別です」

エミィ「世界を救った褒美として王女を娶るだなんてまるで物語のようで素敵なお話ですし、勇者様の高貴な精を受け、王女が英雄の子孕むというのも自然な流れとして受け入れられることでしょう」

エミィ「そして何よりも……英雄とは色を好むもの♪
勇者様が美しいお姫様を娶ってハーレムを作る
事は当然の権利であります故……何も気にしな
くて構いません♪」

ソフィ「そ、そうです……！　勇者様さえ受け入れてく
だされば…ソフィもエミィも、勇者様の奥様とし
てこの身の全てを捧げる覚悟です……！」

ソフィe「ですから……勇者様♪」

エミィe「ですので……勇者様♪」

ソフィf「どうかソフィ達2人のお姫様を、勇者様だけの
女にしてくださいませ♪　ん……ちゅ♪」

エミィf「どうか私達2人のお姫様を、勇者様だけの女に
してくださいませ♪　ん……ちゅ♪」

トラック０４

ソフィ「あ……勇者様、ソフィ達の方から寝室へお呼びしたのにお待たせしてすみません……！」

ソフィ「ちょっと初めて着る衣装に手間取ってしまって……ん……少し遅くなっちゃいました」

エミィ「普段ならメイド達に手伝わせる所だけれども、流石にこの衣装を勇者様とソフィ以外の者に見せるわけにはいかないものね♪」

ソフィ「あぅ～……エミィの言う通り……えっと……勇者様？　ど、どうですか？　ソフィの……そのぅ……エッチな姿……お気に召してくださいましたか？」

ソフィ「こんなスケスケでヒラヒラした下着初めてで……ん……はぁ、はぁ……♪　あぁ……恥ずかしいですぅ……♪」

エミィ「ふふ♪　勇者様ったら目が泳いでおりますわよ？　そんなにオドオドされては、私も……ん……♪　少々恥ずかしくなってしまいます♪」

エミィ「はぁ、はぁ……♪　あぁ……♪　勇者様のねっとりとした視線が胸に……お腹に……太ももに……そしておまんこに♪　ん～……♪　はぁ、はぁ……あぁ……♪」

ソフィ「はぁ、はぁ……♪　勇者様ぁ……♪　ソフィの事ももっと見てください……♪　勇者様に抱かれるために着飾ったお姫様の体を……存分に見て、触れて、感じてほしいんです……」

ソフィ「ん……はい……恥ずかしいですけど……いいんです……だって、ソフィは今から勇者様のお嫁さんになるんですから♪」

ソフィ「勇者様がご覧になりたいのであればいつでもお好きな格好のソフィになりますから……ですからどうか……お姫様のソフィを……勇者様の逞しい御手で、優しく愛でてくださいませ♪」

ソフィ「ん……ぁ……♪　勇者様……ぁむ……っ……ちゅ♪」

ソフィ「ん、ちゅ♪　れろ……ちゅ……ん……勇者ひゃま……ん、あぷっ……♪　ちゅ♪　れろれろ……ん、ちゅ♪　ちゅ……ちゅ♪」

ソフィ「ぁ……♪　きしゅ……初めて……ん……ちゅぷっ……あぷっ♪　ん、ん～……♪　勇者ひゃまときしゅ……ん、ちゅ♪　えへへ……しあわしぇ～……♪　ちゅ♪　れろれろ……ん～……ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

ソフィ「ん……はふぅ～……♪　勇者様ぁ……♪　勇者様勇者様勇者様勇者様～～……♪　ちゅぅ～～……ちゅ♪　ん～♪　もっときしゅ……いっぱいしへくらひゃい～……♪」

ソフィ「ちゅ♪　んちゅ♪　れろ……れろれろ……ん、ちゅ♪　はぁ……ん～～……ちゅ♪　ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ、ん～……ちゅ♪れろ……ちゅ♪　ちゅぅ～……ちゅ♪」

エミィ「あらあら、すっかりソフィに先を越されてしまいました……このままでは勇者様の正妻の座をソフィに奪われかねませんね」

エミィ「私も負けてはいられません……勇者様、どうか私にも勇者様のキスをお恵み下さいませ……」

ソフィ「ん……ふぇ？　ぁ……そんな～……勇者様～～……」

エミィ「あぁ……♪　勇者様ぁ……♪　ん……ちゅ♪」

エミィ「ちゅ♪　ん……勇者ひゃま……♪　ん～……れろれろ……ちゅ♪　ん、ちゅ♪　ちゅ……ん～……ちゅぷ♪　れろ……んちゅ♪　じゅるる♪れ～ろれろれろ……♪　ん、ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

エミィ「はぁ、はぁ……♪　あぁ……♪　どうかもっと深くまで……♪　私の唇を、舌を堪能してください　ませ♪　ん……ちゅ♪　じゅるる……ん～……ちゅ♪　れろれろ……ちゅぷ♪」

ソフィ「うぅ～……ソフィももっともっと勇者様とキスしたいのに～……ぅぅ～～～……勇者様ぁ～……ソフィともう一度キスしてくださいぃ～……」

ソフィ「ほらほら！　ソフィのセカンドキスですよ？　ほら！　ん～～～～～……！」

エミィ「んちゅ♪　じゅるる……ん……ぷはぁ……はぁ、はぁ……全く、ソフィってば、そんな下手な誘惑をしても……ん、ちゅ♪　勇者様は私とのキスに夢中なのですから意味がないわよ？」

エミィ「ふふ♪　さぁ勇者様♪　どうぞお好きなだけこの唇を味わってくださいませ♪　ん～……ちゅ♪　れろれろ……ちゅ♪　ちゅ♪　れろれろ……ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

エミィ「あぁ……♪　勇者様♪　愛しの勇者様……♪　ん～ちゅ♪　さぁ♪　存分に愛し合いましょう？　れ～～～～……ちゅぷ♪　んちゅ♪　ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅ♪」

ソフィ「あぅあぅ～……！　そんな～～！　勇者様の唇をエミィに取られちゃいました～……！」

ソフィ「うぅ～……！　それなら～……ちょ、ちょっと恥ずかしいですけど～……ぅ～～～……！」

ソフィ「ん……あむ、あむあむ……ん～……くちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……」

ソフィ「ん～……勇者ひゃま～……ろうか見へくらひゃい……ソフィのら液いっふぁいのお口れしゅよ～……♪」

ソフィ「ん～……ソフィと沢山きしゅしれ～……いっふぁいソフィのら液、飲んれくらひゃ～～い♪」

エミィ「ん……ちゅ……って……ぁ……勇者様……」

ソフィ「んへへ～……勇者ひゃま……♪　ろうぞ……♪　ん～～……あぷっ♪」

ソフィ「ん～……じゅるる♪　じゅるるる♪　じゅるるるぅ～～～～～♪」

ソフィ

「ん～……いっふぁいベロを絡ませてくらひゃい……♪　ん～……れろれろ♪　じゅるる♪　ん、ちゅ♪　ちゅ……ん～……♪　れろれろ……ん、ちゅ♪　ちゅぅ～……じゅるるるぅ～～～～……♪」

ソフィ

「ふぁい……♪　ソフィのお口で溜めた唾液れしゅ……♪　ん……じゅるるる♪　ちゅ♪　れろれろ……ん～……恥ずかしいれしゅけど……ん♪　勇者しゃまにいっふぁい飲んれ欲しかっらんれしゅ……♪」

ソフィ

「れしゅから～……ソフィのら液、飲めるだけ飲んれくらひゃいね♪　ん～……れ～～～～……じゅる……じゅるる！　じゅるるるぅ～～～～～～～！！　ん、ん～～～～♪」

ソフィ

「じゅるるる♪　んちゅ♪　じゅるる♪　じゅぶぷぷ！　んぷ♪　ん～……♪　勇者ひゃまのら液も甘いれしゅ♪　んちゅ♪　れ～～～～じゅるる♪　じゅるるるるぅ～～～～♪　んふ～♪　れ～～ろれろれろ……ちゅぷぷぷ♪」

ソフィ

「んぷ♪　んぷ♪　ん～♪　はぁ、はぁ……♪　あぷっ♪　んちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるる～～～～♪　ん～♪　勇者ひゃま～♪　らいしゅき～……♪　んちゅ♪　ちゅ……ちゅ～……ちゅ♪」

ソフィ　「お替りもいっふぁいありましゅから……♪　ん～♪　れ～～～ちゅぷ♪　ん～、じゅるる♪じゅるるるぅ～～～～♪　んちゅ♪　れろれろ……ろうぞ♪　ん～～～れ～～ろれろれろれろれろ～～♪」

エミィ　「まさかあの恥ずかしがり屋のソフィがこんな大胆なキスをするだなんて……」

エミィ　「このままですと私、少々手持ち部沙汰になってしまいますね……」

エミィ　「ふむ……それでしたら……」

エミィ　「勇者様♪　失礼ですが、どうかこのままお耳元にて、私のお口の香りを感じてくださいませ♪」

エミィ　「さぁ♪　ソフィの唾液を飲みながらお耳も澄ませて…………ん……くちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ……♪　くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……♪　んふふ♪」

エミィ　「いきまふね……♪　ん～……ぷはぁ～～～～～～～～～～～～♪　はぁ～～～～～～～～♪　はぁ～～～～♪　はぁ～～～～♪　はぁ～～～～～～～～～～～～～～♪」

エミィ

「あぁ♪　勇者様～～……♪　ん～……♪　どうぞ♪　もう一度……ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ♪くちゅくちゅくちゅくちゅ……♪」

エミィ

「ん～……ん……ぷはぁ～～～～～～～～～～～♪　はぁ～～～～～～～～♪　はぁ～～～～～～～～～～♪　はぁ～～～～～～～～～～～～～～～♪」

エミィ

「ん～～……ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅぅ～……ちゅ♪　ふふ♪　この調子でお姫様の唾液の香り♪　お耳に吹きかけて差し上げますね♪」

ソフィ

「ん～……じゅるるるる……！　ちゅ♪　れろれろ……はぁ、はぁ……♪　えへへ♪　勇者様ってばお代わりが欲しいんですね？　はい♪　お任せください♪」

ソフィ

「もう一度お口の中に唾液を溜めて～……ん～……くちゅくちゅ……くちゅくちゅくちゅくちゅ……♪　えへへ♪　いきまふよ～？」

ソフィ

「ん……あぷっ♪　ん、ん～～～～♪　じゅるるるる♪　じゅるるるるるるぅ～～～～～～～～～♪♪」

ソフィ「んぷっ♪　れろれろ……ん～……勇ひゃひゃま～♪　んちゅ♪　じゅるるるる♪　んぷ！
ん、ん～……♪　れ～～ろれろれろれろ……♪
んちゅ♪　ちゅぅ～～～～……ちゅ♪」

ソフィ「ふぁいい……♪　もっろ舌を絡ませましゅぅ……♪　ん～……お口を開いて～……れ～～～～～～……んぷっ♪　じゅるるるる♪　ん～～～～♪　ちゅぷっ♪　れ～～ろれろれろれろれろれろれろ♪♪」

ソフィ「んぷっ♪　じゅるる♪　ん～♪　勇者ひゃま～～♪　勇者ひゃま勇者ひゃま勇者ひゃま勇者ひゃま～～～～♪　んぷんぷんぷんぷ♪　ん～～～～～♪　じゅるる♪　じゅるるる～～～～～♪」

ソフィ「しゅき～♪　しゅきしゅきしゅきしゅき～～～♪　んちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅぅ～～～～～、ちゅ♪」

エミィ「ん……はぁ、はぁ……んもぅ……勇者様ってば、いつまでもソフィにばっかり夢中になって……そろそろ私にも構っていただかなくては不公平ですわ」

エミィ「ほら、ソフィも、いつまでも発情してないでそろそろ交代しなさい？」

ソフィ　「ん、ぷはっ……！　やっ、エミィってばそんな強引に……って、きゃん……！？」

エミィ　「ん……ふぅ～……」

エミィ　「勇者様♪　今度は私と、唾液塗れのエッチなキスを致しましょう♪」

エミィ　「さぁ、どうぞ、私のお口の中を見ていてください♪　先程まで勇者様のお耳にたっぷりと息を吹きかけていたお姫様のお口ですよ♪」

エミィ　「ん……ん～……じゅるる……あ～……んむ……くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……お口の中に唾液をため込んれ……ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅ♪」

エミィ　「んふふ♪　ろうぞ♪　お姫様のロイヤルおロジュース……ご賞味ください……♪　ん……れ～～～～……じゅるる♪」

エミィ　「ん～……じゅるる♪　じゅる♪　じゅぶぶ♪　ん、ん～……♪　れ～～～～ろれろれろれろれろ……れろれろれろれろ～～～～～～……♪」

エミィ　「んちゅ♪　じゅるる♪　ん♪　んぷっ♪　ん～～～♪　勇者ひゃま……♪　もっろ舌を絡ませてくらひゃい……♪　んちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるるぅ～～～～～～♪」

エミィ　「ふぁい♪　わらくひの口から唾液を全て吸い出すように……♪　んちゅ♪　じゅる♪　じゅるるるるぅ～～～～～～♪」

エミィ　「んぷっ♪　れろれろ……♪　勇者ひゃまに飲んでもらう為の唾液れしゅから……♪　んちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるる♪　存分に……ん～……ちゅ♪　味わってくださいませ……♪」

ソフィ　「うわぁ……エミィと勇者様のキス、とってもエッチで厭らしくて……ぅ～～……見ているだけで変な気分になっちゃうよ～……」

ソフィ　「でも……さっきまではソフィが勇者様とシてたんだよね……はぁ、はぁ……ん……ごく……」

ソフィ　「そう思うと、何だかソフィもエッチなお姫様になっちゃったみたいで……ん……はぁ、はぁ……うぅ……お股が切なくなっちゃいますよ～……」

ソフィ　「はぁ、はぁ……ソフィももっとシたいです……いっぱい勇者様とちゅっちゅって……唾液を交換し合うエッチなキスがしたいです……」

ソフィ　「大好きな勇者様にもっともっとソフィの唾液を飲んで欲しい……ソフィのお口を貪って欲しい……ソフィのお口……犯して欲しいですよぉ～……」

ソフィ
「はぁ、はぁ……ん……あぅ～……勇者様ぁ……好き……勇者様だ～い好きぃ……♪　ソフィの勇者様……ソフィの大好きな勇者様ぁ……♪」

ソフィ
「勇者様……♪　勇者様……♪　勇者様……♪　勇者様……♪　ソフィの唾液飲んで欲しいです♪　くちゅくちゅって♪　たくさんごっくんして欲しいです……♪」

ソフィ
「ん……あぁ……♪　勇者様……♪　どうか耳元でもソフィのお口の音……唾液の音……感じてください♪」

ソフィ
「はぁ、はぁ……♪　ん……ん～……くちゅくちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ……♪　ん～……ぷはぁ～～～～～～～～～♪　はぁ～～～～～～～♪　はぁ～～～～～～～♪　はぁ～～～～～～～～～～♪」

ソフィ
「勇者様……♪　好き♪　好き♪　好き♪　好き♪　大好きです♪　ん……ちゅ♪　愛しております♪　ソフィの愛しの勇者様……♪」

ソフィ
「ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅ……♪　ん～……ぷはぁ～～～～～～～～～～♪　はぁ～～～～～～♪　はぁ～～～～～～♪　はぁ～～～～～～～～～～♪」

エミィ　「ん……ちゅ♪　じゅるる……れろれろれろ……んぷ……ん～……じゅるるるるるるぅ～～～～～～……んむ、ぷはぁ……はぁ、はぁ……」

エミィ　「ふふ♪　あぁ、本当にお優しい勇者様♪　はい、かしこまりました♪　元より勇者様を独り占めしようだなんて考えておりませんのでご安心ください♪」

エミィ　「ほらソフィ？　いつまでも勇者様の耳元でハァハァしてないでこっちに来なさい」

ソフィ　「……ふぇ？　エミィ？　それに勇者様も……」

エミィ　「せっかくこの場に勇者様とキスをしたいお姫様が2人もいるのですから……一緒に勇者様とキスしましょう？」

ソフィ　「ふぇ？　い、一緒に……って……え？　3人同時にキスだなんて、そんなエッチな事……」

エミィ　「ほ～ら、つべこべ言わずに……」

ソフィ　「ぁ……きゃぅっ！？」

エミィ　「それでは勇者様♪」

ソフィ　「あぅあぅ～……え、ええっと……！　勇者様！」

エミィ　「私達お姫様のロイヤルおロジュースの飲み比べ♪」

ソフィ　「そのぅ……いっぱい味わってくださいませ……！」

エミィf　「ん……くちゅくちゅくちゅくちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……♪」

ソフィf　「ん……くちゅくちゅくちゅくちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……♪」

エミィg　「はい♪　勇者ひゃま♪　れ～～～～～～～～……♪　んちゅ♪　じゅる♪　じゅるるるる♪じゅるるるるぅ～～～～～～～～～♪」

ソフィg　「はい♪　勇者ひゃま♪　れ～～～～～～～～……♪　んちゅ♪　じゅる♪　じゅるるるる♪じゅるるるるぅ～～～～～～～～～♪」

ソフィ　「ん、じゅるるる……んぷっ……ちゅ♪　ん～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……♪　うぅ……♪勇者様の蕩けたお顔可愛らしいです～♪」

ソフィ　「ん～♪　もっとソフィの味を堪能してください♪　ん……えぅ……ん、くちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅ……」

ソフィ「ん～……ひゃい♪　勇者ひゃま～♪　いっふぁい泡立ったお姫様の唾液れしゅよ～♪　ん……れ～～～～～んぷ♪　じゅるる♪　じゅるるるるるぅ～～～～～～～♪」

ソフィ「ちゅ♪　れろれろ……♪　んちゅ♪　じゅる♪　じゅるる♪　じゅるるるる～～～～～♪」

エミィ「ん、ちゅ♪　勇者様～♪　こちらもご覧になってくださいませ♪　ん……あ～～～～～～～～～～～～♪」

エミィ「んふふ♪　ろうれすか？　私のお口、勇者様からいただいた唾液でいっふぁいになっているのが分かりましゅか？」

エミィ「この大切な勇者しゃまのら液を～……ん～～～～……くちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ……♪　ん……ごく♪　ごく♪　ごく♪　ごく♪」

エミィ「ん……ぷはぁ～……♪　あぁ……♪　勇者様の唾液、ごっくんでいただいてしまいました♪」

エミィ「ん、はぁ、はぁ……♪　あぁ……♪　どういたしましょう……♪　勇者様の唾液が美味しすぎて、はしたなくもお替りを欲しがってしまいます……♪」

エミィ「あぁ……♪　どうか勇者様の唾液をもっとお恵みくださいませ♪」

エミィ「ん……はぷ♪　んちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるるるる～～～～～～～～♪♪」

ソフィ「ん、ん～～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……♪」

エミィ「ん、ん～～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……♪」

ソフィ「んへへ～♪　勇者しゃま～♪　ソフィとエミィのおロジュース……どっちの方が美味しかったですか？」

エミィ「……ふふ♪　同時に味わったからどっちがどっちか分からないだなんて、贅沢な勇者様ですね♪」

エミィ「それでしたら今度は……私とソフィと交互に飲ませてさしあげます♪」

エミィ「さぁ勇者様……♪　どうぞおロをこちらに……♪」

エミィ「ほ～ら♪　おロをお開けになって……ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ……♪」

エミィ「んふふ♪　さぁ♪　エルフのお口でねっとり熟成されたロイヤルおロジュース、召し上がってください♪　ん、はぷ♪」

エミィ「んちゅ♪　じゅる♪　じゅるるる♪　じゅるるるる～～～～～～♪」

エミィ「ん～……れろれろ……♪　ん～♪　もっろ～……♪　んちゅ♪　れ～～～～～……じゅるるるる♪　んぷっ♪　ん♪　ん♪　ん♪　ん～～～～♪」

エミィ「んぷ♪　ん……♪　勇ひゃひゃま……♪　おいひい……♪　んちゅ♪　じゅるる♪　勇ひゃひゃまのお口……んちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるるぅ～～～～～～～～……♪」

エミィ「ん、ん～……じゅるる……じゅるるる……じゅるるるるぅ～～～～～……ん、ぷはぁ！　はぁ、はぁ……♪」

エミィ「あぁ……勇者様……♪　ん……ちゅ♪　お粗末様でした♪」

ソフィ「うぅ……勇者様！　今度はソフィの番ですよ！　さぁ！　どうぞこちらへ……！」

ソフィ「ん……ソフィも……ん～……唾液をお口で溜めて～……ん……えぅ……くちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ♪」

ソフィ「勇者ひゃま～……いきまふね～？　ん……ふぁい♪　ろうぞ～～～～～……♪　れ～～～～～～～～……んちゅぅ～～～～～……じゅるる♪　じゅるるるぅ～～～～～～～♪」

ソフィ「んちゅ♪　じゅるる♪　ん♪　ん～♪　勇者ひゃま～～♪　んちゅ♪　じゅる♪　じゅるる～～～～～♪」

ソフィ「おくち全体れ……ソフィの味を……んちゅ♪　じゅるる♪　ん～♪　味わっれくらひゃい……♪　んちゅ♪　ちゅ♪　ん～……れ～～～ろれろれろ♪」

ソフィ「ん♪　ん～♪　ちゅ♪　しゅき～……♪　勇者ひゃま～～♪　んちゅ♪　ちゅ……じゅる♪　じゅるる♪　じゅるるぅ～～～～～♪」

ソフィ「ん、ん～……じゅるるる……ん……ん～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……♪　えへへへ♪　勇者様ぁ……♪　勇者様ぁ～……♪　しゅきれす～♪　大しゅきれしゅ～♪」

エミィ「ほ～ら♪　今度はまた私と～……♪」

エミィ　「ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ふぁい♪　あ～～～～～んぷ♪」

エミィ　「じゅるるる♪　ん～♪　じゅるるる♪　れ～～～ろれろれろれろ……♪　んちゅ♪　じゅるる……♪　んちゅ♪　れろれろれろれろ……♪」

ソフィ　「うぅ～……ソフィももう一度～……ん～……くちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……♪」

ソフィ　「んぷ……勇者ひゃま～……♪」

ソフィ　「ん……れ～～～～～～……んぷ♪　んちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるる♪　じゅるるる～～～～～～～～～～♪」

ソフィ　「ん……ん～～～～……んちゅ……じゅるるる……ん～……勇者ひゃま……♪　ん、ちゅ♪　ちゅ……ちゅ♪」

ソフィ　「んへへ～♪　ソフィもいっふぁい勇者ひゃまの唾液のおすそ分け♪　いただいちゃいまひた～♪」

エミィ　「ふふ……♪　それれは勇者ひゃま♪　最後は3人で一緒に♪」

ソフィ「ふぁい♪　んへへ♪　ソフィとエミィと勇者ひゃまで♪」

エミィ「ふぇ～……の♪」

ソフィ「ふぇ～……の♪」

エミィ「ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ん……♪　ごく……♪　ごく……♪　ごく……♪　ん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……はぁ～～～～……♪」

ソフィ「ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ん……♪　ごく……♪　ごく……♪　ごく……♪　ん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……はふぅ～～～～……♪」

エミィ「ふふふ♪　勇者様のおいしい唾液ジュース♪　ご馳走様でした♪」

ソフィ「えへへ♪　勇者様のおいしい唾液ジュース♪　ご馳走様でした♪」

ソフィ「……それで勇者様？　結局ソフィとエミィ、どちらのおロジュースが美味しかったですか？」

エミィ「勿論エルフの魔力が多分に含まれた私のおロジュースの方が美味しかったですよね？」

ソフィ「うぅ～……そんな事ないですよね？　ソフィの方が若くて瑞々しい分、甘くて美味しかったですよね？」

エミィ「……ふふ♪　そうですか……私もソフィも甲乙つけがたいと……」

ソフィ「あぅ～……勇者様ってば優柔不断すぎますよ～……でも、それだけソフィ達2人を愛していただけていると思えば……はうぅ～……♪　胸がキュンキュンしちゃいますよ～……♪」

エミィ「……まぁ私もソフィも勇者様のお嫁さんにしていただくのは当然の事ではありますが……」

エミィ「それでもやはり、どちらがより勇者様のお嫁さんとして優秀か、どちらが勇者様の正妻にふさわしいかは重要な事ですので」

ソフィ「……ぅ……そ、そうですね！　勇者様の一番になる為なら、ソフィ、負けられませんから……！」

エミィ「ですので♪　勇者様♪　次はこのまま……お耳ご奉仕で♪　私の虜にしてさしあげますね♪」

ソフィ「ソフィだって頑張るもん！　勇者様にはいっぱいソフィの事……好きになっていただきますからね♪」

トラック０５

ソフィK「すぅ～……ふぅ～～～～～～～～……♪
ふぅ～～～～～～～～♪　ふぅ～～～～～～～♪
ふぅ～～～～～～～～～～～～～～～～♪♪」

エミィK「すぅ～……ふぅ～～～～～～～～～～……♪
ふぅ～～～～～～～～♪　ふぅ～～～～～～～♪
ふぅ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～♪♪」

ソフィ「勇者様……勇者様……♪　ちゅ♪　ちゅ……
ちゅ♪　はい♪　あなた様のソフィはここにいますよ～♪」

エミィ「勇者様……♪　ん～……ちゅ♪　どうぞ、私の豊満な胸を揉みしだきながら楽にしてくださいませ♪」

エミィ「この大きく育ったおっぱいは勇者様の物ですから♪　どれだけ揉んでも、抓っても、引っ掻いていただいても構いません♪」

エミィ「すべては勇者様の望むままに……それが勇者様の一番のお嫁さんであるエミリアの望みでもありますから♪　ん……ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪」

ソフィ「いいえ、勇者様？　勇者様の一番のお嫁さんはソフィですからね？　ほら……こっちですよ？
こ～～……っち♪」

ソフィ「はい♪　勇者様～……ん～……ちゅ♪　えへへ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪」

ソフィ「そうです♪　勇者様の事が世界で一番大好きな可愛いお姫様、ソフィです♪　ん～、ちゅ♪　勇者様……♪　勇者様勇者様～……♪　ちゅ♪　ん～……ちゅ♪　ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅ♪」

エミィ「ん……ぁん♪　ふふ♪　勇者様ってば、私の乳首ばかりそんなに弄られて……ぅ……ぁん♪　はぁ、はぁ……♪　はい♪　とってもお上手で……ん♪　私も感じております♪」

エミィ「はぁ、はぁ……♪　ん、ちゅ♪　ふふ♪　勇者様……♪　その調子で……♪　ん♪　お姫様の勃起乳首を弄んでください♪」

エミィ「そうです……♪　乳首を抓りながらコリコリと……ん♪　ぁん♪　はぃ……♪　どうぞ……ん♪　はぁ、はぁ……♪」

エミィ「まだ母乳が出ませんが……ん♪　近い将来勇者様に孕ませていただきますから……ん♪　その予行練習として……今の内から私のおっぱいで乳搾り練習をしてくださいませ……♪」

エミィ「ん……はぁ、はぁ……あぁ……♪　勇者様……♪　ん～……勇者様……勇者様ぁ……♪　ぁ……♪　ん……ちゅ♪　ちゅ……ちゅ♪」

ソフィ「ぅ～……勇者様ぁ……エミィの体だけでなく、どうかソフィの体も……おっぱいも堪能してください……」

ソフィ「ほら、エミィほどじゃないですけど、ソフィもそのぅ……おっぱいには自信がありますから……ほら、タプタプスベスベで柔らかいですよ？」

ソフィ「ね？　勇者様……どうぞ……いっぱい揉んでください……♪」

ソフィ「ん……ぁ……♪　はぃ……そ、そのまま……どうぞ、下着の中に指をいれて……って、ひゃぅ～～っ……！？」

ソフィ「ひゃ、ひゃいぃ……ちょっとビックリしちゃっただけで……ん……ぁん♪　は、はぃ……大丈夫ですから……ん……えへへ♪　もっと……ん……ちゅ♪　もっと私の体で楽しんでください……♪」

ソフィ「そうれす……ん♪　ぁん♪　はぁ、はぁ……♪　うぅ……勇者様の指が乳首に触れて……ん、ぁん♪　ぁ……♪　やっ……♪　ん♪　勇者しゃま……♪　ん♪　ぁ♪　ぁ……♪　ぁん♪」

ソフィ「ぁ……ぁぅ……♪　ん♪　はぁ、はぁ……♪　そこ好き……♪　ん……♪　乳首の穴……ホジホジされるの大好きです……♪」

ソフィ「は、はぃ……♪　そこから母乳が出るようになるんですよね……♪　ん……♪　ぁぁ……♪　勇者様の赤ちゃんに飲ませるエッチな母乳……♪」

ソフィ「ん♪　はぁ、はぁ……♪　え、えへへ♪　勿論、ん♪　孕ませていただいた暁には……ん♪　勇者様にもいっぱい飲ませてあげますから♪」

ソフィ「この乳首は勇者様の物だって……♪　ソフィの母乳が勇者様と赤ちゃんの物だって♪　今の内にいっぱい揉んで……ん♪　ぁん♪　は、はぃ……♪　マーキングしてください……♪」

ソフィ「ん……はぁ、はぁ……♪　勇者様……♪　ん～……ちゅ♪　れろ……ちゅ♪　好き……♪　大好き……♪　ちゅ♪　れろ……ちゅ♪　ちゅ……ちゅ♪」

エミィ「ん……ちゅ♪　ちゅ……ちゅ♪　ん……？　ふふ♪　勇者様ってば、お耳の中にこんなに沢山汚れをため込んでしまって♪　まるでお耳掃除ができない赤子のようです♪」

エミィ　「ほ～ら♪　このように～……ん……ひと舐めしただけで……れ～～～～～～ろ……ちゅ♪　こんなにお耳のゴミが……いいえ♪　勇者様の黄ばんだ耳カスが♪　取れてしまいましたよ？」

ソフィ　「……ん……わわ……こっちのお耳からも……ん……ちゅ……れろ……ちゅ……はぅ～……ソフィの唇にも沢山勇者様の耳カスが付いて……」

ソフィ　「ん……あむ……あむあむ……ん……ごく……んへへ～……♪　勇者様の耳カス美味しいです～♪」

エミィ　「もしもこのような事が他の者にバレでもしたら、私とソフィは勇者様のお体をお清めする事も出来ない不出来なお嫁さんと思われてしまいます」

エミィ　「そうなっては困りますので……ここは♪　私のなが～いこの舌で♪　全て舐め取り綺麗にして差し上げます♪」

ソフィ　「そうです……！　旦那様のお体を綺麗にするのもお嫁さんのお役目ですもん♪　ソフィも頑張って勇者様のお耳を綺麗にしてあげます♪」

ソフィ「……ぁ……べ、別に勇者様の耳カスがもっと食べたいとかそういう事ではなくてですね？　あくまでお嫁さんとしてお掃除しなきゃですから……」

エミィ「ふふ♪　まぁお隣で勝手に盛り上がってる変態プリンセスは放っておいて……勇者様♪　お耳の奥……失礼いたしますね♪」

ソフィ「ぁ……ゆ、勇者様！　ソフィもお耳、失礼いたします……！」

エミィ「ん……れ～～～～……ろれ～～～ろれろれろ……♪」

ソフィ「ん……れ～～～～……ろれ～～～ろれろれろ……♪」

エミィ「んふふ♪　勇者様～……♪　お加減はいかがですか～？　ちゅ♪　じゅるるる……れ～～～ろれろれろれろ……ん……ちゅ♪　お耳の中、もっと舐めてほしい所などございませんか～？」

ソフィ「……こちらも～……ん～……れ～～ろれろれろ……んちゅ♪　もっと奥を舐めてほしいなど、して欲しい事があれば遠慮せずにおっしゃってくださいね？」

エミィ「ん……れろれろ……じゅるる……んふふ♪　例えば～……先ほどのように唾液をいっぱい舌に塗して～……」

エミィ「ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ふふ♪　私の唾液でお耳の中を～……洗い流してさしあげまふね～……♪」

エミィ「ふぁい♪　勇者ひゃま♪　ん、れ～～～～～～～～……ろれろれろれろれろ～～～～～～♪　んちゅ♪　じゅる♪　じゅるるる～～～～♪」

エミィ「んぷ♪　れろれろ……♪　んちゅ♪　じゅるる♪　ん……じゅぷぷ♪　勇者ひゃま……♪　ちゅ♪　じゅるる……ちゅ♪　れろれろ……れ～～～ろれ～～ろれろれろ♪」

ソフィ「ん……勇者ひゃま～……ソフィも……いっぱい唾液を流し込んで綺麗に洗い流してあげます♪」

ソフィ「ん……こうやって……お口に唾液をため込んで～……ん～……くちゅくちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ……♪　んへへ♪　勇者ひゃま～♪　いきまふね～♪」

ソフィ「ん……れ～～～～～～～～……ろれろれろれ～～～～～～～～～～……じゅるる♪　じゅるるるる～～～～～～♪」

ソフィ「んちゅ♪　じゅるる……♪　ちゅぷ……♪　ん……れろれろれろ……ん～……ちゅ♪じゅるる……♪　耳カスぅ～……もっろ食べちゃいまふ～……♪　じゅる♪　じゅるるる♪」

エミィ「ん……ちゅ♪　勇者様♪　すぅ～～～～……ふぅ～～～～～～～～～～～♪　ふぅ～～～～～♪　ふぅ～～～～♪　ふぅ～～～～♪　ふぅ～～～～♪　ふぅ～～～～～～～～～～～～～～～♪」

ソフィ「ん……ちゅ♪　勇者様♪　すぅ～～～～……ふぅ～～～～～～～～～～～♪　ふぅ～～～～～♪　ふぅ～～～～♪　ふぅ～～～～♪　ふぅ～～～～♪　ふぅ～～～～～～～～～～～～～～～♪」

ソフィ「んへへ♪　勇ひゃひゃま～♪　分かりまひゅか？　今……ソフィのおくひの中に勇者ひゃまの耳かしゅがた～くさん溜まっているんれすよ～？」

エミィ「ふふ♪　まさかこんなに沢山舐めとれりゅだにゃんて……ん……くちゅくちゅ……ふふ♪　ではソフィと共に……」

ソフィ「ふぁい♪　大しゅきな勇者ひゃまの耳かしゅ……ごっくんしちゃいまひゅね？」

エミィ＝「勇者ひゃま……♪　ん……♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ん……♪　ごく……♪　ごく……♪　ごく……♪　ごく……♪　ん……ぷはぁ～……♪　はぁ、はぁ……♪」

ソフィ＝「勇者ひゃま……♪　ん……♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ん……♪　ごく……♪　ごく……♪　ごく……♪　ごく……♪　ん……ぷはぁ～……♪　はぁ、はぁ……♪」

エミィ「ふふ♪　おいしい耳カス、ご馳走様でした♪」

ソフィ「はぅ～～♪　この耳カスも勇者様からいただいた物だと思うと、それだけでどんなお料理よりも美味しく感じられます～♪」

ソフィ「えへへ♪　これからは毎日お耳ペロペロいてあげますから、シテ欲しくなったら教えて下さいね？」

ソフィ　「だって……ソフィは勇者様のお嫁さんなんですから♪　な～んて♪　えへへへ～～～♪」

エミィ　「ソフィの言う通り、シテ欲しい時はいつでも……って、あら？　あらあら？」

エミィ　「ふふふ♪　勇者様ってば、いつの間にか……こ～ち～ら♪　勇者様の大切な……おちんぽ様♪　とっても逞しく勃起されておりますよ？」

ソフィ　「ふぇ？　わ……！？　わわわ……！？　こ、これが勇者様のおちんぽ様……！？　って、わわっ！　す、凄いです……！　益々大きくなって……！」

エミィ　「両側からお耳を舐められて興奮してしまったのですね♪　本当に可愛らしく初心な勇者様♪」

エミィ　「先っぽが綺麗なお皮に隠れられていて……あぁ♪　おちんぽ様とっても愛らしいです♪」

エミィ　「……ふふ♪　構いませんよ？　勇者様がお望みであれば……またお耳を舐めながらおちんぽ様をシコシコしてさしあげます♪」

エミィ　「……はぃ♪　勇者様は夢心地のまま……どうぞ、私の耳舐めおちんぽシゴきをお楽しみください♪」

ソフィ　「エミィがするならソフィも一緒に……！　勇者様……ソフィもいっぱい勇者様の……ぉ……ぉ……おちんぽ様……！　シコシコさせていただきますね……？」

エミィ　「あら♪　恥ずかしがり屋のソフィにおちんぽ様のお世話が出来るとは思えないけれど？」

ソフィ　「ぅぅ～……そんな事ないもん……！　ソフィだって……大好きな勇者様の……そのぅ……おちんぽ様のお世話くらい出来るもん……！」

エミィ　「ふふ♪　それでしたら……より気持ちよくおちんぽ様をイカせた方が勇者様の正妻という事で♪」

ソフィ　「ぅ、ぅん……！　望むところだよ……！」

エミィ　「では、勇者様……♪」

ソフィ　「勇者様～……♪」

エミィ。　「れ～～～～ろれろれろれろれろれろれろれろ～～～～～～……♪　ん～……じゅるるる♪　じゅるるるる～～～♪」

ソフィ。　「れ～～～～ろれろれろれろれろれろれろれろ～～～～～～……♪　ん～……じゅるるる♪　じゅるるるる～～～♪」

エミィ　「ん、ちゅ♪　は～い♪　おちんぽシコシコ♪
おちんぽシコシコ♪」

エミィ　「れろれろれろれろ……んふふ♪　おちんぽ様の
余った皮と一緒に……おちんぽシコシコ♪　お
ちんぽシコシコ♪　おちんぽシコシコ♪　おち
んぽシコシコ♪」

ソフィ　「んちゅ♪　じゅるるる……ん～……れろれろれ
ろれろれろれろれろれろれろれろ……ちゅ♪　勇者ひゃ
ま～……♪　勇者ひゃま～……♪」

ソフィ　「ひゃい♪　おちんぽシコシコ♪　おちんぽシコ
シコ♪　おちんぽシコシコ♪　おちんぽシコシ
コ♪」

ソフィ　「んちゅ♪　じゅるじゅる……んへへ♪　勇者
ひゃまのおちんぽ様……可愛らしい包茎おちん
ぽ様……♪　好き……♪　勇者様の包茎おちん
ぽ様大好きれす～……♪」

ソフィ　「はぁ、はぁ……♪　もっと……♪　ん～……
ちゅ♪　皮の中に隠れた先っぽもシコシコして
あげますね♪」

ソフィ　「はい♪　おちんぽシコシコ♪　おちんぽシコシ
コ♪　おちんぽシコシコ♪　おちんぽシコシコ
～……♪」

エミィ　「んちゅ♪　じゅるじゅる……ん～……♪　包茎おちんぽ様の中で熟成された、くさ～いチンカスがこんなに沢山……♪　ふふ♪　このチンカスも指で掬い取って～……またおちんぽ様に絡めて～……♪」

エミィ　「ちゅ♪　れろれろれろれろ……ん～……♪　ろうれすか～……？　お姫様の綺麗な指先がチンカスで汚れていく光景は？　ふふ♪　とっても淫靡で背徳的で……興奮してしまいますね……♪」

エミィ　「ん～……じゅるる♪　れろれろれろれろ……♪　ふふ♪　ほ～ら♪　チンカス塗れのお手々で～……おちんぽシコシコ♪　おちんぽシコシコ♪　おちんぽシコシコ♪　おちんぽシコシコ～♪」

ソフィ　「れろれろれろれろ、れろれろれろれろ……ん～……勇者ひゃま～……♪　こちら、お金玉もモミモミしてさしあげますね？」

ソフィ　「んちゅ……れろれろ……ん～……お金玉を～……モミモミ♪　モミモミ♪」

ソフィ　「あぁ……♪　ここに勇者様の偉大なお子種が詰まっているんですよね……♪　あぅ～……ソフィの事を孕ませてくれる大切なお子種がここに……♪」

ソフィ「ん……ちゅ♪　れろれろ……ちゅ♪　ちゅ♪
勇者様……♪　ん～……れろれろれろれろれろれろれろれろ♪」

エミィ「あぁ……♪　チンカスと我慢汁が溶け合ってグチュグチュ泡立ってきましたね♪　ふふ♪
とっても美味しそうなチンカスジュースの出来上がりです♪」

エミィ「本来であれば、お姫様である私がこんなはしたない言葉を口にするなど許される事ではありませんが……外ならぬ勇者様が興奮してくださるのでしたら……ん♪　いくらでも下品に囁いてさしあげます♪」

エミィ「そう……このように……勇者様のくさ～いチンカス様♪　チンカス♪　チンカス♪　チンカス♪　チンカス包茎ちんぽ様♪」

エミィ「勇者様の可愛らしい包茎ちんぽ様♪　皮に隠れた恥ずかしがり屋の包茎ちんぽ様♪　臭いチンカスでいっぱいの包茎ちんぽ様♪」

エミィ「ほ～ら♪　包茎♪　包茎♪　包茎♪　包茎♪
可愛らしい包茎チンポさ～……ま♪　ちゅ♪
れ～ろれろれろれろれろれろれろ……♪」

ソフィ「ぅ～……ソフィもソフィも～……勇者様～……♪　ソフィも勇者様の包茎おちんぽ様大好きです……♪」

ソフィ「ずっしりと大きなお金玉も好きです……おちんぽ様を綺麗に包んでいる愛らしいチン皮も好きです……カリが大きなおちんぽ様も好きです……」

ソフィ「そして……とっても臭いのに……それでも目が離せない……包茎の中で蒸れた臭〜い勇者様のチンカス様も大好きです……♪」

ソフィ「はぃ……♪　ソフィはエッチなお姫様ですから、勇者様のチンカス様が好きなんです……大好きなんです……♪」

ソフィ「はぁ、はぁ……♪　あぅ〜……♪　チンカス様ぁ……♪　勇者様のチンカス様ぁ……♪」

ソフィ「チンカス様♪　チンカス様♪　チンカス様……♪　チンカス様ぁ〜……♪」

ソフィ「好き♪　すき……すき……すき……すきぃ……♪　大好きです♪　ん〜……れ〜〜ろれろれろれろ……ちゅ♪　ん〜……ちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるるる〜……♪」

エミィ「れろれろれろれろ……じゅるる♪　ちゅ♪　勇者様の愛しいチンカスおちんぽ様……♪　ん〜……れろれろれろれろ♪」

ソフィ「じゅるる……♪　ん～♪　勇者様の包茎おちんぽ様しゅきれす……♪　れろれろれろれろ……じゅるる……♪　チンカスおちんぽ様らいしゅきれしゅ……♪」

ソフィ「ん～……♪　れろれろれろれろれろれろれろれろ……♪　チンカスおちんぽ様～……♪　チンカスおちんぽ様～……♪」

エミィ「ん～……れろれろれろれろ……じゅるる……じゅるる……♪　んふふ♪　勇者様……もうイキそうになっておられまふね～……？」

エミィ「じゅるる……じゅるるる～……ふぁい♪　いいんれふよ？　お好きなタイミングでおちんぽ様イっへくらひゃいまへ……♪　ん、れ～～～ろれろれろれろれろ……♪」

ソフィ「ん～……♪　あぅ～♪　おちんぽ様がビクビクと震えられて……♪　ちゅ♪　れろれろ……♪　勇者しゃま～……♪　どうかソフィのお手々でイっへくらひゃい♪」

ソフィ「ほ～ら♪　こうやって～……♪　おちんぽシコシコ♪　おちんぽシコシコ♪　おちんぽシコシコ♪　おちんぽシコシコ～♪」

ソフィ「ん～……ちゅ♪　れろれろ……♪　れろれろれろれろれろれろれろれろれろ～……♪」

エミィ　「ん……はぁ、はぁ……♪　勇者様♪　勇者様……♪　ちゅ♪　じゅるるる～～～～……♪　ん～、さぁ♪　どうぞ♪　私とソフィで5つ数えるうちにイってくださいませ♪」

エミィ　「そ～れ……♪　ご～～～～～～～～～～……ぉ♪　ん～……れろれろれろれろ♪　れろれろれろれろれろ♪　れろれろれろれろれろれろ♪」

エミィ　「んちゅ♪　じゅるじゅる……ん～……剥きたて包茎おちんぽ様……沢山ぴゅっぴゅしてくらひゃい……♪　んちゅ♪　じゅるる♪　れろれろれろれろ♪　れろれろれろれろ♪」

ソフィ　「ん～……よ～～～～～～～～～～……ん♪　じゅる♪　じゅるるる♪　ソフィの耳舐めで感じながら……ん～……じゅるる♪　可愛らしいおちんぽぴゅっぴゅ見せてくらひゃい……♪」

ソフィ　「勇者様のチンカス塗れの愛らしいおちんぽぴゅっぴゅ♪　あぁ……♪　勇者様……勇者様ぁ……♪」

エミィ　「れろれろれろれろ……ん……さ～～～～～～～～～～……ん♪　れろれろれろれろ♪　ん……ふふふ♪　勇者しゃまのチンカスザーメン♪　れろれろれろれろ♪　早く私のお手々にかけてほしいです……♪」

エミィ　「チンカスザーメン♪　チンカスザーメン♪　さぁ……あと少し……いっぱいぴゅっぴゅしてくださいませ♪」

ソフィ　「れろれろれろれろれろれろれろ……ん……に〜〜〜〜〜〜〜〜〜……ぃ♪　ちゅ♪　れろれろれろれろ♪　勇者しゃま〜♪　好きです♪　勇者様の包茎おちんぽ様も♪　おチンカス様も♪　お金玉様も♪　みんなだ〜い好きです♪」

ソフィ　「このおちんぽ様の為ならソフィ、何でもしてあげちゃいます♪　ん〜……じゅるるる♪　んちゅ♪　れろれろ、れろれろれろれろ……♪」

エミィ　「ん〜……い〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜……ち♪　ふふ……♪　勇者様……♪　どうぞ存分に気持ちいいおちんぽぴゅっぴゅ♪　してくださいませ♪」

エミィｒ　「さぁ♪　勇者様……♪　勇者様……♪　勇者様……♪」

ソフィｒ　「さぁ♪　勇者様……♪　勇者様……♪　勇者様……♪　勇者様……♪」

エミィs　「ん～……れ～～～～～ろれろれろれろれろれろれろれろ
れろ♪　れろれろれろれろれろれろれろ♪
　れろれろれろれろれろれろれろれろれろ♪　れろ
れろれろれろれろれろれろれろ♪」

ソフィs　「ん～……れ～～～～～ろれろれろれろれろれろれろれろ
れろ♪　れろれろれろれろれろれろれろ♪
　れろれろれろれろれろれろれろれろ♪　れろ
れろれろれろれろれろれろれろれろ♪」

ソフィt　「せ～～……の♪　ゼロ……♪　ゼロ……♪　ゼ
ロ……♪　ゼロ～～～～～～～～……♪」

エミィt　「さん……はい♪　ゼロ……♪　ゼロ……♪　ゼ
ロ……♪　ゼロ～～～～～～～～……♪」

エミィu　「はい♪　おちんぽぴゅっぴゅ♪　おちんぽ
ぴゅっぴゅ♪　おちんぽぴゅっぴゅ♪　おちん
ぽぴゅっぴゅ～～～～～～♪」

ソフィu　「はい♪　おちんぽぴゅっぴゅ♪　おちんぽ
ぴゅっぴゅ♪　おちんぽぴゅっぴゅ♪　おちん
ぽぴゅっぴゅ～～～～～～♪」

ソフィ　「ん……きゃん♪　わ～わ～♪　勇者様のお射精
……とっても勢いが凄くて……ん……ぁん♪
カッコイイです～……♪」

エミィ「本当に……♪　ん……ぁん♪　やぁ……♪　私のおっぱいにまでお射精が飛んできて……あぁ……♪　これが勇者様のお射精……♪　ザーメンの香りなのですね……♪」

ソフィ「あぅ～♪　勇者様～……♪　存分におちんぽ様ぴゅっぴゅしてくださいっ♪　それそれ♪　おちんぽぴゅっぴゅ♪　おちんぽぴゅっぴゅです～♪」

エミィ「勇者様♪　おちんぽぴゅっぴゅっぴゅ♪　おいんぽぴゅっぴゅ♪」

ソフィ「おちんぽぴゅっぴゅ♪　おちんぽぴゅっぴゅ♪」

エミィ「おちんぽぴゅっぴゅ♪」

ソフィ「おちんぽぴゅっぴゅ♪」

エミィv「おちんぽぴゅっぴゅ♪　おちんぽぴゅっぴゅ♪　おちんぽぴゅっぴゅ♪　おちんぽぴゅっぴゅっぴゅぅ～～～～～～～～～～～♪」

ソフィv「おちんぽぴゅっぴゅ♪　おちんぽぴゅっぴゅ♪　おちんぽぴゅっぴゅ♪　おちんぽぴゅっぴゅぅ～～～～～～～～～～♪」

エミィ「ん……はぁ～……ふふ♪　勇者様♪　おちんぽぴゅっぴゅ、お疲れ様でした♪」

ソフィ　「はい♪　とっても素敵なおちんぽぴゅっぴゅでした♪　ソフィ……あまりの逞しさにドキドキが止まらなくなっちゃいましたよ～……♪」

ソフィ　「はぁ……勇者様～……♪　ん……ちゅ♪　れろ……ちゅ♪　ん～……ちゅ♪　ちゅ……ちゅ♪　はい……♪　本当に……お射精……お疲れ様でした……♪　ん……ちゅ♪　ちゅ……ちゅ♪」

エミィ　「あぁ……♪　あれだけ長いお射精をされたのにまだあんなに逞しく勃起されて……♪　流石は勇者様♪　数多の魔族を打ち倒してきた英雄様ですね♪」

エミィ　「このおちんぽ様であれば私を……妊娠しづらいエルフのお姫様おまんこもきっと孕ませてくださるはずです♪」

ソフィ　「勇者様？　勿論エミィだけでなく、ソフィの……そのぅ……おまんこにも種付け……してくださいますよね？」

ソフィ　「ソフィも大好きな勇者様のお子種でいっぱい赤ちゃん産みたいです……これから毎日……何度でも勇者様がご満足されるまでソフィのおまんこを使ってほしいんです……」

エミィw

「ですので……♪　勇者様♪　どうかこの高貴で雄々しいおちんぽ様で、勇者様の赤ちゃん、孕ませてくださいませ……♪」

ソフィw

「ですから……♪　勇者様♪　どうかこの高貴で雄々しいおちんぽ様で、勇者様の赤ちゃん、孕ませてくださいませ……♪」

トラック０６

ソフィ　「そ、それで……勇者様？　ソフィとエミィ……どちらから先に召しあがりますか？」

ソフィ　「できればそのぅ……ソフィ……もう我慢の限界でして……おまんこも……ん……ぁん……♪ん……ぁ……あぅ～……ぐちゅぐちゅ濡れちゃってまして……だから……あのぅ……そのぅ……」

エミィ　「ふふ♪　勇者様、どうか先にソフィの事を抱いてあげてくださいませ♪」

ソフィ　「ふぇ……！？　え、エミィ……？　いいの……？」

エミィ　「えぇ♪　構わないわよ♪　勇者様の立派なおちんぽ様であれば、ソフィとエッチした後でもしっかり勃起してくださるでしょうし♪」

エミィ　「それに、どれだけソフィとエッチした後でも、最後に私のおまんこに帰ってきてくだされば私は満足ですので♪　そぅ、それこそが正妻の余裕というものでしょう？」

ソフィ　「あぅ～～……そ、そんな事ないもん！　勇者様はきっとソフィのおまんこでメロメロになって、ず～～っとソフィのおまんこの中にいたいって思ってくれるはずだもん……！」

エミィ　「あらあら♪　未だ経験のない生娘の癖にそこまで啖呵を切れるだなんて、ソフィってば自信過剰なのね♪」

ソフィ　「そんな事いったらエミィだって処女でしょ～！」

ソフィ　「むぅ～……エミィなんてソフィと勇者様のラブラブエッチを見ながら一人エッチしてればいいんだもん！」

ソフィ　「ん……勇者様～……♪　ん……しょ……っと……」

ソフィ　「今はエミィの事なんか忘れて、どうかソフィの処女をもらってください……♪」

ソフィ　「ソフィは正真正面の処女おまんこですから……♪　はい……お姫様の処女おまんこ……ロイヤルヴァージンです♪」

ソフィ　「勇者様に捧げる為に大切にとってきたソフィのロイヤルヴァージンを……どうかこちらのおちんぽ様で……ん……貫いてくださ……い……ん……あぁん♪」

ソフィ　「ん……ぁ……♪　勇者……さ……ま……♪　ん……ぁ♪　は、はぃ……♪　ソフィは……ん♪　大丈夫ですから……♪」

ソフィ「はぁ、はぁ……はぃ……♪　奥まで来てください♪　大好きな勇者様……♪　愛しの勇者様……♪」

ソフィ「んくっ……♪　ぁ……♪　き、来ましゅ……♪　おちんぽ様が……おまんこに……♪　ん……ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　あ……♪　あぅぅぅうううぅぅ～～～～～～～～……♪　ん、っきゅぅぅうううぅぅ～～～～～～～～

ソフィ「勇者様～……ん～……ちゅ♪　れろ……ちゅ♪
ちゅ……ちゅ……ちゅ……ちゅ♪」

ソフィ「おちんぽ様を迎え入れながらのキス大好きです
……♪　ん……勇者様……♪　ちゅ♪　れろ…
…ちゅ♪　ん……ちゅ♪　ちゅ……ちゅ♪」

ソフィ「ソフィのおまんこはもう大丈夫ですから♪
はぁ、ん……♪　はぃ……♪　どうかこのまま
ソフィとの初夜をお楽しみください♪」

ソフィ「ん……ぁ♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪
ぁん……♪　んぁ……♪　ぁ……♪　ゆ、勇
者さ……ま……ん～……♪♪　ぁぁん……♪
んぁ♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ…
…♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁぅ……♪」

ソフィ「はぁ、はぁ……♪　勇者様……♪　ん……ぁ
ぷっ♪　んちゅ♪　じゅるる♪　ん……ちゅ♪
れろれろれろれろ……♪　ん……ぁん♪　ぁ
……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ…
…♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁぅ～……♪」

ソフィ「ぅ～……♪　素敵です……♪　素敵すぎますぅ
……♪　勇者様とのせっくしゅ……♪　ん…
…ぁん♪　ぁ……♪　おちんぽ様素敵すぎます
よ～～……♪」

ソフィ「ぁ……♪　ぁ……♪　ん……ぁん♪　勇者様の優しいおちんぽピストンが……ん♪　クリちゃんの裏側擦って……ん～……♪　とっても気持ちいいです～……♪」

ソフィ「はぁ、はぁ……♪　ん、ぁぅ～……♪　そこ……♪　んぐっ……ぁ……♪　は、はいぃ……♪　ソフィの赤ちゃんのお部屋に……ん……♪　勇者様の亀頭が入ってます……♪」

ソフィ「は、はぃ……♪　勇者様とソフィの赤ちゃん……ん、ぁん♪　ぁ……♪　ぁ……♪　あぅ……♪　おちんぽ様にぴゅっぴゅしていただくソフィの子宮です……♪」

ソフィ「ん……ぁ……♪　もしお望みでしたら朝から晩まで、ソフィのロイヤルおまんこでゆっくりしていただいてもいいんですよ……？」

ソフィ「ん……お食事中も……ん♪　おまんこパンパンしながら口移しで食べさせてあげますし……ん♪　お手洗いの際も……是非このままおまんこの中でジョロジョロおしっこして欲しいです……♪」

ソフィ

「だって……ん♪　ソフィは勇者様の一番のお嫁さんですもん……♪　大好きな旦那様の望みなら……ぁん♪　は、はぃ……♪　ロイヤルお便器にも……ロイヤルおちんぽケースにもなりますもん……♪」

ソフィ

「ですから……ん♪　どうか……はぁ、はぁ……♪　勇者様の大切なお子種様も……勇者様のおちんぽ様に張り付いたチンカスも……♪　勇者様のおしっこも……♪　全てここに……♪　ん～……♪　ソフィの赤ちゃんのお部屋に擦り付けてください♪」

ソフィ

「ん……ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁぅ～……♪　ん……！　ぁ……ぁぁ……♪　勇者様～……♪　ん～……♪　や……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁぐぅ……♪」

ソフィ

「ぅぅ……勇者様ぁ……♪　そんなに愛らしくおちんぽ様コスコスされると……ん……やっ……だ、ダメ……♪　お、おまんこ……♪　おまんこおかしくなりましゅ……♪　おかしくなっちゃいましゅ……♪♪」

ソフィ「はぁ……♪　はぁ……♪　はぁ……♪　はぁ……♪　ん……♪　ぁ……♪　勇者様……♪　勇者様……♪　ん……ぁ……♪　はぁ、はぁ……♪　ん……ぁん♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁぁ……♪」

ソフィ「んぁ……♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ん、あぐっ！　ぅ……だ、ダメ……♪　ダメダメダメダメ……！！」

ソフィ「はぁ、はぁ……ん♪　おまんこ感じすぎて……も、もぅ……イっ……っきゅ……♪　お、おまんこイっきゅ……♪　イキュ……♪　おまんこ……♪　イキュ……♪」

ソフィ「ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁぁ……♪　イキュ……♪　イキュイキュイキュイキュ……♪」

ソフィ「ん～～～～～～……！！　っっっきゅぅぅぅぅぅぅ～～～～～～～～……♪♪」

ソフィ「ん、んん～～～～～～～～～～～～♪♪　ん……はぐぅ～……♪♪　ん、ぅ～～～～……や……♪　ん……はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……♪」

ソフィ

「あぅ～……ゆ、勇者しゃま～……♪　そ、ソフィ……♪　初めてなのに……ん……はぁ、はぁ♪　え、えへへ……♪　おまんこ、イっちゃいまひた～～……はぁ、はぁ……って、はひぃっ……！！？？」

ソフィ

「んぉ……♪　お……♪　お……♪　お……♪　ぐぅ～……♪　しょ、しょんな……勇者しゃま……♪　ソフィ、今イったばかりなのに……　んぁ♪　や、ぁ……♪　んぉ……♪　おちんぽしゃま……激ひぃれふ～……♪」

ソフィ

「はぁ、ん、やぁ……♪　ぁ……ぁ……ん……そんにゃにソフィの痙攣おまんこホジホジされると……ん……んぉ……♪　お……おまんこ気持ちよしゅぎて変になっちゃいますよぉ……♪　んぉ……♪　お……ぉぉ……♪」

ソフィ

「ですが……ん♪　ぁん♪　ゆ、勇者様がソフィを求めてくれてると思うと……んぁ……♪　ん、ぁ……♪　ぁん♪　はぁ、はぁ……♪　あぅ～……♪　嬉しいです……♪　嬉しいですよ～……♪」

ソフィ

「んぁ……♪　ぁ、ぁ……♪　勇者しゃま……♪　勇者しゃま～～……♪　もっろおぐぅ……♪　おちんぽしゃまもっとおぐまれ来てくら　ひゃぃ～……♪　んぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁぐぅ～……♪」

ソフィ「ひゃぃ～……♪　ソフィはおちんぽしゃまが大しゅきな変態お姫様でしゅから～……♪　ん…ぉ……♪　ぉ……♪　ぉ～……♪　おちんぽしゅきしゅきお姫様でしゅから～……♪」

ソフィ「もっと～……♪　ぁ……♪　ん～……♪　もっとソフィのおまんこホジホジしてくらひゃいぃ……♪　ん……ぁ～♪　勇者しゃまのおちんぽ様の事しか考えられないお馬鹿なおまんこにしてくらひゃいぃ～……♪」

ソフィ「んぉ～～……♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉ～……♪」

ソフィ「んぐ～……♪　おちんぽしゃましゅき～……♪　おちんぽしゃま～……♪　ソフィの大好きなおちんぽしゃま～……♪♪」

ソフィ「はぁ、はぁ……ひゃぃ～……♪　ソフィのおまんこはお馬鹿でしゅ～……♪　お馬鹿なお姫しゃまおまんこれしゅ～……♪　んぁ♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉぉ～……♪」

ソフィ「そうれしゅ……♪　ソフィのお姫しゃまおまんこにチンカスこすり付けれて、勇者様だけのロイヤルチンカシュおまんこにしへくらひゃいぃ……♪」

ソフィ「勇者様のチンカシュもお子種も……♪　全部ソフィのおまんこの物……♪　ソフィだけのおチンカシュ様なんですからぁ……♪」

ソフィ「んぁ……♪　お……♪　お……♪　お……♪　おぉ……♪　勇者しゃまのチンカスぅ……♪　勇者しゃまのチンカしゅおちんぽしゃま～……♪」

ソフィ「んぁ♪　お……♪　お……♪　お……♪　おぉ……♪　おまんこの中全部チンカシュになっひゃうくらい……♪　ん、ぁん♪　あぅ……♪　いっふぁいチンカシュ食べさせてくらひゃい～……♪」

ソフィ「はぁ、ん、ぁん♪　ぁ、ぁ、ぁ、ぁ～……♪　勇者しゃま勇者しゃま～……♪　好きぃ……♪　好き好き好き好きら～いしゅきぃ～……♪」

ソフィ「ん～……ぁ……♪　勇者しゃま～……しゅき♪　しゅき♪　しゅき♪　しゅきぃ……♪　ん……ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁぁん……♪」

エミィ「あらあら♪　ソフィも勇者様も、私の事なんて忘れてすっかりエッチに没頭してしまって……」

エミィ「ふふ♪　勇者様～……？」

エミィ「確かに私とはソフィの後で構いません、と言いましたが……ここまでソフィと2人っきりの世界を作られてしまいますと、私も些か嫉妬してしまいますよ？」

エミィ「で・す・の・で♪　ソフィとシながらで構いませんから私のご奉仕もご堪能くださいませ♪」

エミィ「はぁ～～～～～……♪　勇者様……♪　ん～……ちゅ♪　れ～～～～～ろれろれろ♪　れ～～～～～ろれろれろれろれろれろ～～～～～……♪」

ソフィ「んぁ……♪　ぁ♪　ぁぁ……♪　ゆ、勇者様ぁ……♪　ん……ぁん♪　また一段とおちんぽ様が大きくぅ……♪　んぉ……♪　ぉ、ぉぉ……♪　そ、そんなにエミィのご奉仕がいいんですか……？」

ソフィ「はぁ、はぁ……♪　ん……でもぉ……今は、ぁん♪　ソフィとのエッチに集中してくらひゃい……♪　ん……あぷっ♪　んちゅ♪　れろれろ……んちゅ♪　じゅるる♪　ん～……ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

ソフィ「はぃ……♪　ソフィのおまんこと一緒に、唇でも……ん～……ちゅ♪　キスしてあげちゃいます♪　さぁ……♪　お口を開けてくださいませ……♪」

ソフィ「はぁ、はぁ……♪　勇者様の大好きなソフィの唾液……ん～……♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　飲ませてあげまひゅ……♪　ん……れ～～～～～……あぷ♪」

ソフィ「んちゅ♪　じゅるるるる♪　ん～……勇者ひゃま～……♪　じゅるるる♪　んちゅ♪　じゅるる……♪　ん、ん～……勇者ひゃま♪　勇者ひゃま～……♪」

ソフィ「ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ……♪　じゅるる♪　じゅるるるぅ～～～～～……♪　んぁ……♪　ん♪　じゅるる♪　んちゅ♪　じゅる……ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪」

ソフィ「ん……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……んぁ♪　お……♪　お……♪　お……♪　おぉ……♪　ゆ、勇者しゃま～……♪　しゅきれす♪　らいしゅきれす……♪」

ソフィ「勇者様のお顔も♪　唇も♪　お耳も♪　おちんぽ様も♪　お金玉様も♪　全部全部……ぜ～んぶ大好きれしゅぅ～……♪」

ソフィ「ですからソフィも～……ん……ぁん♪　ソフィの全部を勇者しゃまに捧げまひゅ……♪　この唇も♪　唾液も♪　おっぱいも♪　んぉ……♪　お……♪　お……♪　ぉお……♪　おまんこも～……♪」

ソフィ

「はぃ……♪　ソフィは勇者しゃまだけのお姫様ですからぁ……♪　勇者様が望むならどんな事でもしますから～……♪」

ソフィ

「はぁ、はぁ……♪　お嫁さんおまんこにも♪都合のいいロイヤルおまんこ……♪　ロイヤルオナホールにだってなりますから～……♪」

ソフィ

「ですから……ん……ぁん♪　勇者しゃま～……♪　ソフィの事も、ソフィのおまんこの事も幸せにしてくださいぃ……♪　ソフィをいっぱい愛してくださいぃ……♪」

ソフィ

「ん……あぁん♪　ぁ♪　ゆ、勇者しゃ……まぁ……！？　んぉお……！！　お……♪　お……♪　お……♪　お……♪　お……♪　お……♪　おぉ～……♪♪」

ソフィ

「は、はひッ……！？　勇者しゃま激ひぃれふ……！　んぉ……♪　お……♪　お……♪　お……♪　おぉ……♪　お……♪　お……♪　おぉ～……♪♪」

ソフィ

「こ、これが……んぉ……♪　ゆ、勇者しゃまの愛……♪　おちんぽ様の愛なんれしゅね……♪　んぉ……♪　お……♪　お……♪　お……♪　おぉ……♪」

ソフィ「だ、ダメれしゅ……♪　ソフィ、お姫様なにょに～……♪　ん、ぉ……おぉ……♪　へ、変な声……♪　下品な声漏れちゃいましゅ……♪
お……♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉ……♪
おぉ……♪」

エミィ「あぁ……♪　勇者様～……♪　聞こえておりますか～？　ソフィってば、聴いたことのないような下品で汚らしい声を上げてますよ～？」

エミィ「ふふ♪　勇者様の前であのように下品に乱れるだなんて♪　よっぽどこのおちんぽ様がおまんこに合っているようですね♪」

エミィ「あぁ……♪　とってもエッチな姿……♪　とてもではありませんが、一国を収める姫の姿とは思えません♪」

エミィ「……きっと私も、勇者様のおちんぽ様でお腹を突かれれば同じように乱れてしまうのでしょうね……あぁ……♪　考えただけで子宮がウズウズしてしまいます♪」

エミィ「……はぁ、はぁ……♪　あぁ……♪　勇者様ぁ……♪　どうか私にも勇者様のおちんぽ様をお恵み下さい……♪　勇者様のおちんぽ様で下品によがらせて下さい……♪　ん……ちゅ♪」

ソフィ「んぉ……♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉぉ……♪　ゆ、勇者ひゃま～……♪　んも、もぅ、限界れしゅ……♪　お、おまんこイっひゃいましゅ……♪　おまんこイっひゃいましゅぅ……♪」

ソフィ「ぉ……♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉぉ……♪　おちんぽしゃまと一緒にイキたいれしゅ……♪　んぉ……♪　おまんこイキたいれしゅ……♪　勇者様と一緒におまんこイキたいれしゅ……♪」

ソフィ「んぉ♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉぉ……♪　ひゃ、ひゃいぃ……♪　い、一緒……♪　う、嬉しいれしゅ♪　はいぃ……♪　ソフィと一緒にぃ……♪　おちんぽ様イってくらひゃい……♪♪」

エミィ「あらあら♪　それでしたら私がタイミングをとってさしあげますので♪　どうかソフィと一緒にイってくださいませ♪」

エミィ「さぁ♪　勇者様……いきますよ～？」

エミィ※「じゅ～う♪　きゅ～う♪　は～ち♪　な～な♪　ろ～く♪　ご～お♪　よ～ん♪　さ～ん♪　に～い♪　い～ち♪」

ソフィ※

「んぉ……♪　お……♪　お……♪　お……♪
おぉ……♪　勇者しゃま♪　勇者しゃま～……♪　しゅ、しゅきぃ……♪　しゅきしゅきしゅきしゅきぃ……♪」

ソフィ※

「お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪
お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪　お♪
お♪　お～……♪♪」

ソフィ※

「あぁ……♪　勇者しゃま勇者しゃま～……♪
もぅイギましゅ♪　おまんこイキましゅぅ……♪♪」

ソフィ※

「んぉ～～～～……♪　おまんこイギュぅぅ……♪　イクイクイクイクイクイクイク♪　イクイクイクイクイクイクイクぅ～～～～～……♪」

エミィ×

「ゼロ♪　ゼロ♪　ゼロ♪　ゼロ～～～～～

ソフィ「やっ……ん♪　す、凄いれしゅ……♪　ソフィのおまんこ、いっぱいぴゅぴゅってされて……♪」

ソフィ「はぁ、はぁ……♪　んぁ……♪　はぃ～……♪　もっと……ん、あん♪　お金玉様が空っぽになるくらい沢山注ぎ込んでください……♪」

ソフィ「はぁ……ん♪　勇者様……ん～……ちゅ♪　れろれろ……ふぁい♪　ろうぞ♪　キスしながらいっぱい出しましょうね♪　ん～……ちゅ♪　れろれろ……ちゅ♪　ん～……勇者しゃま～……♪」

ソフィ「ちゅ♪　じゅるるる♪　ん……ふぁい♪　一緒に……♪　それ♪　おまんこきゅっきゅ♪　おまんこきゅっきゅ～～～～～……♪♪」

ソフィ「おまんこでもっと……んちゅ♪　れろれろ……おちんぽ様を包み込むように～……それ♪　おまんこきゅっきゅ♪　おまんこきゅっきゅ♪　おまんこきゅっきゅ♪　おまんこきゅっきゅ～～～～～～～……♪」

ソフィ「ん……ちゅ♪　じゅるるる……♪　ん、ちゅ♪　れろ……ちゅ♪　ん～……ちゅ♪　えへへへへ～～～～～♪　勇者様～♪　ん～……ちゅ♪　ちゅ……ちゅ♪」

ソフィ

「はい♪　これで正真正面、ソフィは勇者様の女になれました♪　えへへ♪　そうですよ～？　勇者様は可愛いお姫様をお嫁さんにしちゃったんですよ～？」

ソフィ

「んへへへ～♪　どうか今後も……ソフィのお姫様おまんこにいっぱいぴゅっぴゅして……可愛い赤ちゃんを産ませてくださいね♪　勇者様♪　ん～……ちゅ♪」

トラック07

エミィ「まぁ……♪　勇者様ってば、ソフィの中であんなに精液をお出ししたというのに、また大きく勃起されて……♪」

ソフィ「わわ～……ソフィの愛液と勇者様の精液でおちんぽ様がドロドロに……ぅぅ～……見てて恥ずかしくなっちゃいますよ～……♪」

エミィ「あら、そこはもっと誇るべき所でしょう？　あの偉大な勇者様の精をその身で受け止めたのですから」

ソフィ「そ、そうなんだけど～……はぅ～……はぅはぅ～……」

ソフィ「ぅ～……エミィは恥ずかしくないの？　ソフィがエッチした直後の……そのぅ……愛液がべったり張り付いたおちんぽ様でセックスするの……」

エミィ「ふふ♪　別に今更ソフィの愛液が付いてるとか付いていないとかどうでもいいことだわ」

エミィ「正直な話、他の女性ならいざ知らず、ソフィという私と比較しても見劣りしない愛らしいお姫様がいるというのに、それを無視して勇者様を独占できるとは思っておりません」

エミィ「ですが、そんなソフィとの重婚生活の中であっても……どれだけ勇者様とソフィがエッチしたとしても……最後の最後に私の元に……私のおまんこに帰ってきてさえいただければ満足なのです♪」

エミィ「私は勇者様の帰ってくる理由であり、場所であり続けたい……」

エミィ「で・す・の・で……♪　勇者様……♪　ん……ちゅ♪」

エミィ「例えどれだけソフィとエッチしたとしても、最後には私のおまんこに帰っていただけるよう、どうか今宵はエミリアのエルフおまんこの中で溺れてくださいませ♪」

エミィ「ん……ぁ……♪　はぁ、はぁ……♪　ん……くっ……♪　ふふ♪　さぁ勇者様♪　勇者様を想ってぐちゅぐちゅに濡れそぼったロイヤルおまんこヴァージンを♪　御身のおちんぽ様で貫いてください……♪」

エミィ「んぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　あぁ……♪　き、来ます……♪　勇者様のおちんぽ様が……ん……ぁん♪　お、おまんこに……ぁ、ぁ、ぁぁ……♪　んっ……きゅうぅぅ～～～

エミィ「ん……はぁ……！　はぁ、はぁ……♪　ぅ……♪　ぁ、ぁぁ……♪　無事に勇者様のおちんぽ様を迎え入れられました……♪　はぁ、ん……あぁ……♪」

エミィ「これがセックス……♪　愛する殿方とのおまんこセックスなのですね……♪」

エミィ「ん、あぁ……♪　何ということでしょう……一つに繋がった途端、勇者様への愛がとめどなく溢れて……♪　はぁ～……♪　あぁ……♪　愛おしくて愛おしくて堪りません……♪」

エミィ「勇者様……♪　はぃ……♪　好きです……♪　ん……ちゅ♪　れろ……ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　はい……♪　愛しております♪　愛しております……♪」

エミィ「ん……ちゅ♪　れろ……ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ん……ちゅ♪　れろ……ちゅ♪　あぁ……♪　好きです……♪　好き……♪　好き……♪」

エミィ「もうこのおまんこは勇者様だけの物です♪　おまんこから漏れるはしたないお汁も♪　ピンク色に花咲くおまんこのビラビラも♪　勿論、おちんぽ様がコンコンしている赤ちゃんのお部屋も♪」

エミィ「ん……あぁ……♪　ですからどうか……ん……はぁ、はぁ……♪」

エミィ「勇者様のおちんぽ様で、この卑しくもエッチに子種をねだるロイヤルおまんこを、思う存分お楽しみくださいませ♪」

エミィ「ん……ぁ……♪　あん♪　やっ……♪　ゆ、勇者様……♪　ん……♪　ぁ♪　ぁ♪　あぁ……♪　やっ♪　ん♪　そ、そんないきなり……♪　ん……ぁん♪　つ、強く……♪　んぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ～～♪」

エミィ「ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁぁ……♪　勇者様のおちんぽ様……♪　んぁ……♪　ぁ、ぁぁ……♪　奥まで響いてきます……♪　んぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁぁ……♪」

エミィ「まさかこれほど……ん～……♪　これほどおちんぽ様に愛されるのが素敵な事だなんて……ん……ぁん～……♪　はぁ、はぁ……え、エルフとして長く生きてきましたが……ん、あん♪は、初めて知りました……♪」

エミィ

「んぁ♪　ぁ♪　ん♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ……♪　ゆ、勇者様……♪　どうかキスしながら……ん……あぷっ♪　んちゅ♪　じゅるる♪　んちゅ♪　じゅるる……♪　ん♪　ん♪　はぁ、はぃ……♪　ろうぞ……♪　んちゅ♪　れろれろ♪」

エミィ

「ん、ちゅ♪　ふぁい♪　ん……とことんまれ、ちゅ♪　おまんこ愛してくだひゃいませ……♪」

エミィ

「んちゅ♪　じゅるじゅる……♪　ん～♪　ふぁい♪　勇者ひゃまのカリ高包茎おちんぽ様れ……んちゅ♪　じゅるじゅる……♪　おまんこのお肉を削ってくだひゃい……♪」

エミィ

「あむ♪　んちゅ♪　じゅるじゅるじゅるじゅる♪　ん～……じゅぷぷ♪　ちゅぷ♪　じゅるる♪　ん……あぁん♪　ぁ♪　ぁ♪　そ、そこ……♪　んぁ……♪　ぁ……♪　あぁ……♪」

エミィ

「はぁ、はぁ……ぁん♪　は、はぃ♪　いいれす……♪　クリトリスの裏側……♪　おちんぽ様で押し上げられるのが堪りません……♪」

エミィ

「ん……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁぐぅ……♪　んふ……！　ん、あぁ……勇者様……♪　んぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ～……♪」

エミィ「ん、ぁん♪　そ、そんな……おちんぽ様でこすり上げるような動きをされては……ん、ん～～～～～……♪　んぁ……♪　私のお腹におちんぽ様の形が浮き出て……んぉ……♪　ぉ……♪　ぉぉ……♪」

エミィ「んぁ……♪　はぁ、はぁ……♪　ぅ……♪　は、はしたない声が……ん♪　抑えられなくなって……！」

エミィ「はぁ、はぁ……♪　んぁ……♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉ……♪　ぉぉ～～……♪　ん、あぐ……♪　ん♪　はぁ、はぁ……ぁ……♪　ん、ぁ……♪　あぅ～……♪」

エミィ「んぁ……♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ～……♪　ゆ、勇者様……♪　ん……はっ……ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁぁ～～……♪」

エミィ「どうぞ……ん♪　この調子で、ん、おまんこを使って包茎の中のおチンカス様を洗い流してください……♪　ん……ぁん♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ～～……♪」

エミィ「はぃ……♪　私のおまんこは勇者様のチンカス掃除もできますので……♪　ん、ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁぁん……♪」

エミィ「はぁ、はぁ……♪　ソフィとのエッチで汚れたおちんぽ様を洗い流す都合のいいおまんこでも構いませんから……♪　ん……ぁ……♪　ぅ……ん……あぁん♪」

エミィ「ん……で、ですから……♪　んぁ……♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　どうか毎日……♪　ん♪　私のおまんこを使っておちんぽ様を綺麗にしてくださいませ……♪」

エミィ「おちんぽ様の一日の汚れは私の物……♪　お掃除は正妻の……私の役目ですから……♪　ん……ぁん♪　ぁ……♪　ぁ……♪　ぁ……♪　あぁん……♪」

ソフィ「ぅ～～～……ぅ～～ぅ～～～……！　勇者様もおちんぽ様も、さっきまでソフィのおまんこにメロメロだったのに～～～……」

ソフィ「そりゃあエミィは顔もおっぱいもおまんこも、全部ぜ～んぶ綺麗でエッチだから夢中になっちゃうのもわかるけど……でも、ここまで蚊帳の外にされると……あぅ～……どうしても嫉妬しちゃいますよ～……」

ソフィ「ぅ～～～～……勇者様～～～～～……」

ソフィ　「エミィとエッチしながらで構いませんから、どうかソフィの事も忘れないように……お耳でソフィの吐息を……熱を……感じてくださいませ……♪」

ソフィ　「ん……ちゅ♪　れ～～ろれろれろれろれろ……♪」

エミィ　「んぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁぐ……♪　んぉ……♪　ゆ、勇者様……♪　ん♪　こ、このようなのはいかがですか？　ん……こぅ……おまんこに力を入れて……♪　おまんこきゅっきゅ♪　おまんこきゅっきゅ♪」

エミィ　「って、んぉ……！？　お……♪　おぉ……♪　そ、そんな……♪　おちんぽ様ってば……んぉ……♪　ぉ♪　ぉ♪　ぉ♪　ぉ♪　ぉ♪　ぉ♪　ぉ♪　ぉ～……♪」

エミィ　「こ、これ……♪　想像以上に……んぉ♪　感じすぎてしま……って、んぉ～～～……♪　ぉ♪　ぉ♪　ぉ♪　ぉ♪　ぉ♪　ぉ♪　ぉ～～～～……♪」

エミィ　「んぁ……♪　ゆ、勇者ひゃまはこれがお好きなのですね……♪　はぁ、はぃ……♪　では存分に……♪　んぉ……♪　おまんこきゅっきゅ♪　おまんこきゅっきゅ♪　おまんこきゅっきゅ♪　おまんこきゅっきゅ♪」

エミィ

「はぁ、はぁ、はぁ……♪　あぁ……♪　勇者様の感じられているお顔……とっても可愛らしくて……ん……ぁん……♪　はぁ、はぁ……♪　あぁ……♪　どうしようもなく子宮がキュンキュンしてしまいます……♪」

エミィ

「あぁ……勇者様～……♪　どうかおまんこの締め付けを味わいながら私の唾液もお楽しみください……ん～……れ～～～～～～～……んちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるるる♪　じゅるるるる～～～～～～～～♪」

エミィ

「んぷっ♪　れろれろれろれろれろれろれろれろれろれろ♪　んちゅぷぷ♪　ずぶぶぶ♪　んぷっ♪　れろぷちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるるるるる～～～～～♪」

エミィ

「ん……ぷは……♪　はぁ、はぁ……♪　あぁ……♪　もうお口もおまんこも……♪　ぁん♪　発情したお汁でいっぱい……♪　ん……はぷ♪　じゅるる♪　じゅるるるる♪　ん～……れろれろれろれろ♪」

エミィ

「ちゅ♪　じゅるる……♪　ん～……♪　ちゅ♪　はぁ、あぁ……♪　勇者様の臭いチンカスの香りも、私のおまんこの香りも、唾液の香りも……♪」

エミィ
「すべてが一つに合わさって……ん～……じゅぷぷ♪　んぷ♪　れろれろ……ちゅ♪　ん～……あぁ……♪　興奮してしまいます……♪　ん～……れろれろ♪　じゅるる♪　ん……ちゅ♪」

エミィ
「んぁ……♪　はぁ、はぁ……♪　ん……♪　勇者様も……ん、私の香りをいっぱい堪能してください……♪」

エミィ
「はぁ、はぁ……ん♪　さぁ……♪　どうぞ……♪　お姫様の唾液たっぷりの口臭……ん……はぁ、はぁ……すぅ～……はぁ～～～

エミィ「もっろ唾液を……んぁ……♪　ん……じゅるる♪　ん、ん～～～～……♪　っじゅる♪
じゅるるるるる～～～～……ん、んむぅ……
♪　んふふ♪」

エミィ「さぁ……♪　もう一度……ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅ……♪　ん……ぷはぁ～～～～

ソフィ「ちゅ……れろれろ……ん？　えへへ♪　勇者様ももぅイキそうなんれすか？　ん、ちゅ♪　れろれろれろれろ……はい♪　それならソフィも、勇者様がいっぱいイケるようにお手伝いさせていただきます♪」

ソフィ「んへへ～♪　勇者様～？　ソフィの合図でどうぞ一緒にイってくださいね♪　はい♪　いきますよ～？」

ソフィ※「そ～れ♪　じゅ～う♪　きゅ～う♪　は～ち♪　な～な♪　ろ～く♪　ご～お♪　よ～ん♪　さ～ん♪　に～い♪　い～ち♪」

エミィ※「んぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁぁ～……♪　はぁ、はぁ……♪　ん……勇者様……♪　勇者様……♪　どうぞ……♪　ん♪　イってくださいませ♪」

エミィ※「私のお腹が勇者様のお射精で膨らんでしまうくらい……確実に勇者様との赤ちゃんを孕んでしまえるくらい沢山……ん……あ♪　ぁ♪　ぁ♪　ぁぁ……♪　沢山注いでくださいませ……♪」

エミィ※「ん、はぷっ♪　んちゅ♪　じゅるる♪　じゅるる♪　ん～……勇者ひゃま……♪　れろれろ……ちゅ♪　じゅるじゅる……♪　ん～……勇者ひゃま……勇者ひゃま……♪」

エミィ※

「ふぁい♪　イっへくらひゃい♪　んちゅ♪
じゅるるるる♪　わたくひの唾液を味わいながらイっへくらひゃい……♪　おちんぽ様イっへくらひゃい……♪」

エミィ※

「ん～……れろれろれろれろれろれろれろれろれろ♪
　んちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるるる♪　ん～……じゅりゅりゅ♪　んちゅ♪　はぷ♪　ん～……れろれろ……ちゅ♪　ん～ちゅ♪」

エミィ※

「あぁ♪　勇者様♪　勇者様♪　勇者様♪　勇者様～～～……♪　ん、ん～～～～……！　じゅるる！　じゅるるるる！　じゅるるるるるるる～～～～

エミィ「ん～……ちゅ♪　れろれろ……ん……注ぎ終わるまでずっとこうして……ん……ちゅ♪　勇者ひゃまとキスしてまひゅから……♪　んちゅ♪　れろれろ……♪　れろれろれろれろ……♪」

エミィ「ふぁい……♪　勇者ひゃま……♪　ん……ちゅ♪　れろれろ……ちゅ♪　じゅるるる♪　ん……ちゅ♪　れろれろ……ん、ん～……好きです……愛しております……♪　わたくひの勇者ひゃま……♪」

エミィ「はむ……♪　ちゅ♪　れろれろ……れろれろれろ……ん……ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ん～……ちゅ♪　れろ……ちゅ♪　じゅるる……ん……ちゅ♪」

エミィ「勇者ひゃま……勇者ひゃま……♪　ん～……ちゅ♪　れろれろ……ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪」

ソフィ「……って、あ、あれ？　エミィ？　いつまで勇者様とキスしているつもりなの？」

ソフィ「もう勇者様のお射精も終わってるよね！？　なのにいつまでも勇者様とキスしているだなんてズルイよ！　ルール違反だよぉ！」

エミィ　「ん……ちゅ……ん……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……ふふ♪　ソフィってばダメよ？　勇者様のおちんぽ様はこのまま私のおまんこの中で眠りにつくのですから♪」

ソフィ　「え、えぇ……！？　そ、そんな事聞いてないよ！？」

エミィ　「ソフィには勇者様の童貞を譲ってあげたんですから、このくらいの事は譲歩はして貰わないと♪」

エミィ　「そ・れ・に♪　先ほども言いましたが、私のおまんこは勇者様にとって帰るべきお家でありたいですから♪」

エミィ　「今夜はこのまま……ん……ぁん♪　どうぞ……私のおまんこでお休みいただき、勇者様だけのおちんぽケースにしてくださいませ♪」

エミィ　「はい♪　愛しておりますよ♪　勇者様……♪ん……ちゅ♪」

トラック０８

ソフィ「は～い♪　勇者様のおちんぽ様～……♪　お目覚めのお時間ですよ～♪」

ソフィ「って、あぅ～……寝ている間もずっとエミィのおまんこの中にいたせいか、おちんぽ様から凄く臭い匂いがしますよ～……」

エミィ「あらソフィ？　それは暗に私のおまんこが臭いと言いたいのかしら？」

エミィ「はぁ～……ソフィとは長い付き合いになるけれど、面と向かってそんな事を言われる日が来るだなんて……とっても悲しいわ～……」

ソフィ「ふぇ……！？　ちょ、ちょっと……！　そんな事言ってない……って、元はと言えばエミィが勇者様のおちんぽ様を放さなかったのが原因でしょ……！」

ソフィ「出来る事ならソフィもおちんぽ様と一晩中……うぅん、一日中繋がっていたいのにぃ……」

エミィ「ふふ♪　まぁ今後は2人とも勇者様のお嫁さんとして一緒にいられるのですからいくらでも機会はあるでしょう」

エミィ「……っと、今はそんな事で言い争っていないで、すべき事をしなくてはね」

ソフィ「あ……そ、そうだよね……ソフィ達はもうただのお姫様じゃなくて、勇者様のお嫁さんなんだもん！」

ソフィ「お嫁さんの大切なお仕事……それは愛する旦那様のおちんぽ様を綺麗に、清潔に保つ事……！」

エミィ「そうね……毎日おまんこを気持ちよくしていただく大切なおちんぽ様ですもの」

エミィ「世界で一番ご立派で愛おしい、勇者様の包茎おちんぽ様……♪　こんな素敵なおちんぽ様のお掃除を、ただシャワーで洗い流したり紙切れで拭いたりでは、あまりにも失礼ですから……」

ソフィ「うん！　勇者様の偉大なおちんぽ様だもん！そんな消耗品で綺麗にするんじゃなくて……ソフィ達のお口おまんこで……キレイキレイしてあげますね♪」

エミィ「ふふ♪　それでは……♪」

ソフィ「勇者様……♪」

エミィN「おちんぽ様……失礼致します♪　ん、れ～～～～～～～～ろれろれろれろれろ♪」

ソフィN「おちんぽ様……失礼します♪　ん、れ～～～～～～～～ろれろれろれろれろ♪」

ソフィ「んちゅ♪　れろれろれろれろ……ん、ぁん♪　勇者様ってば、ん、ちゅ♪　れろれろ……たった一晩おまんこの中でゆっくりしていただけで……ん♪　おちんぽ様にこ～んな沢山チンカスがついてしまうだなんて……」

ソフィ「ん……れろれろ……じゅるる……ん……ちゅ♪　えへへ♪　本当に可愛らしい包茎おちんぽ様です♪」

エミィ「ふふ♪　きっとこのチン皮のせいね……ん～……ちゅ♪　じゅるじゅる……ん、おまんこでキレイキレイ出来たと思っていたけれど……射精した精液がチン皮の中でまた溜まってしまうから……ん、ちゅ♪　じゅるじゅる……♪」

エミィ「このように毎日……ん……れ～～～ろれろれろ……じゅる♪　じゅるるる♪　んふふ♪　チン皮の中に舌をいれて～……チンカス掃除してさしあげないと……ん、れ～～～ろれろれろれろれろ……♪」

ソフィ「ん……ソフィも……包茎おちんぽ様の臭いチンカスペロペロしてあげますね～♪　ん、おちんぽ様の皮の中にベロを入れて～……れ～～～～ろれろれろ……じゅる……じゅるる♪　じゅるるるる～～～～～♪」

ソフィ「ん、ん～……ちゅ♪　れるれる……ん、ぢゅる♪　んちゅ♪　ん、ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

ソフィ「ん、ぁん♪　やぁ……♪　包茎おちんぽ様の段差にビッチリチンカスが張り付いて……ん……ちゅ♪　れろれろ……♪　ん～……やん♪　ベロがチンカス臭くなってしまいます……♪」

ソフィ「はぁ、はぁ……♪　ぅ～……♪　苦くて生臭くて……スン♪　スンスン……すぅ～～～～～……はぁ～～～～～～～～……♪　癖になるチンカス臭……♪」

ソフィ「ん、ちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるる……♪　ん～……♪　もっとお姫様のお口でチンカス掃除させてくらひゃい……♪」

エミィ「んちゅ♪　れろれろ……ん～……♪　勇者ひゃまのチンカス……♪　あむ♪　じゅぶじゅぶ……じゅる……じゅるるる……♪」

エミィ「ん、はぁ～……♪　唇にチンカスが張り付いて……ん、あむ♪　あむあむ……♪　んふふ♪　勇者様のチンカス美味しいです……♪　んちゅ♪　じゅるじゅる……ん、じゅるる……じゅるるる～……♪」

エミィ「お口の中でコネ回すと……ん♪　まるで米粒のように固まって……♪　ん……♪　くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……ん～……あむ♪　ん……ごく♪　ごく♪　ごく♪　ごく……ん～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……♪」

エミィ「あぁ……♪　もっと……ちゅ♪　れろれろれろ……♪　朝一番の出来たてチンカスを食べさせてください♪　ん……れ～～ろれろれろれろれろ……♪」

ソフィ「んむ……じゅるじゅるじゅるじゅる……ん、ん～……んへへへ～……♪　勇者ひゃま～……んちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるる……♪」

ソフィ「ソフィのベロは……ん～……れろれろれろれろ……じゅるる……勇者様専用のおちんぽブラシでしゅから……んちゅ♪　じゅるじゅる……♪　いつれもおちんぽ様が汚れたら言っへくらひゃいね？」

ソフィ「その時はこうやっへ～……れろれろれろれろ、れろれろれろれろれろ……ん～……れ～～～ろれろれろれろれろ♪　じゅる♪　じゅる♪　じゅるるる～……♪」

ソフィ「んぷ♪　ん♪　チンかしゅれもおしっこれも……じゅるじゅる……全部綺麗にしてあげましゅ……♪　んちゅ♪　れろれろ♪　れろれろれろれろ♪」

エミィ「じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶ……ん？　勇者様ってば……れろれろ……おちんぽがドンドン膨らんできて……ん、んぷっ……！」

エミィ「ん～……じゅるるるる……んぷ……ん、んふふ♪　もぅ我慢できないご様しゅ……♪　ん、れは盛大に……ん、ん～……じゅるる♪　じゅるるるる～～～～～～……♪」

ソフィ「ん、やっ……ソフィも……ん、勇者しゃま……♪　ろうぞソフィのお口の中へらしてくだひゃい……♪　ん、あ～～～～～……んむぅ♪　じゅる♪　じゅるる♪　じゅるる～～～～～♪」

ソフィ「んぶんぶんぶんぶ♪　ん、ん～……♪　勇者ひゃま勇者ひゃま♪　イっへ？　ソフィのお口でイっへ？　ん、じゅる♪　じゅるる♪　じゅるるるる～～～～～♪」

エミィ「ん♪　わらくひのお口の中れもいっへくらひゃい♪　ん♪　勇者ひゃまのおちんぽミルク……全部このお口まんこに出してくらひゃいませ……♪」

エミィ「ん♪　ンぶんぶんぶんぶんぶんぶ♪　ん、ん～……♪　じゅるる♪　じゅるるる♪　ん、じゅるるるる～～～～～～♪」

ソフィ「ん♪　勇者ひゃま♪　イっへ♪　イっへ♪　イっへ♪　イッへ♪」

エミィ「勇者ひゃま……♪　んぶ♪　ん、ん～～～♪　じゅるるる♪　んぶ♪　ん♪　イっへくらひゃい♪　勇者ひゃま♪　ん、じゅるる♪　勇者ひゃま……♪」

ソフィA「んぷ♪　ん♪　じゅるる♪　じゅるるる♪　じゅるるるるるるる～～～～～～

エミィB　「ん、んぶぶぅ！？　んぶ！？　ん、んむぅ……ん……じゅる……じゅるる……じゅるる……ん、ぶぷぷぷっ！　ん、ん～……ん、じゅる、じゅぼぼぼ……ん、じゅるるる……じゅるるるる～～～～～……」

ソフィC　「んむ……ん♪　ん～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……はふぅ～……♪」

エミィC　「んむ……ん♪　ん～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……はぁ～～……♪」

ソフィ　「んへへ♪　勇者ひゃま～……♪　ソフィのおくひ♪　勇者ひゃまのおちんぽみりゅくでいっふぁいになっちゃいまひた～♪」

エミィ　「んふふ♪　お姫様二人のお口をザーメンでいっふぁいにすりゅだなんて……ん……あむ……ふふ♪　流石は勇者ひゃまれす……♪」

ソフィD　「ん……それれは勇者ひゃま♪」

エミィD　「ん……それれは勇者ひゃま♪」

ソフィ　「ソフィとエミィが勇者ひゃまのおちんぽみりゅくとチンかしゅをごっくんする音……♪」

エミィ　「是非お楽しみくらひゃいませ……♪」

ソフィE

「ん……あ～～～……んむ……♪　ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪」

エミィE

「ん……あ～～～……んむ……♪　ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪」

ソフィF

「ん……ん～……ごく♪　ごく♪　ごく♪　ごく♪　ん……ん～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……はぁ～～～～～～……♪」

エミィF

「ん……ん～……ごく♪　ごく♪　ごく♪　ごく♪　ん……ん～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……はぁ～～～～～～……♪」

ソフィ

「んへへ♪　勇者様～……ん～……ちゅ♪　はい♪　朝一番のおちんぽみるく、ご馳走様でした♪」

エミィ

「ふふ♪　一晩お眠りになっただけでこの濃さと量……♪　私、あまりの感動にまたおまんこが疼いてきてしまいました♪」

ソフィ

「勇者様？　本日は正式な婚姻を結ぶ挨拶や儀式で忙しくなりますが、それでも、もしソフィ達を抱きたくなったらいつでも言ってくださいね？」

エミィ「政などは他の者に任せられますが、勇者様の性欲処理は勇者様の正妻であるエミリアにしか務まりません……ですからどうか我慢などなさらず、その際は遠慮なく股を開けとお命じ下さい♪」

ソフィ「むむむ……勇者様……？　勇者様にふさわしい正妻はソフィなんですから、エッチしたくなったらソフィから呼んでくださいね？」

ソフィG「はい♪　これからもず～っとず～～～っと大好きです♪　愛しの勇者様♪」

エミィG「ふふ♪　これからも末永く愛し愛でてください　ませ♪　最愛のあなた様♪」